

昭和十一年五月廿日第三種郵便物認可(毎月二回一日發行)
昭和十一年六月廿日印刷納本 昭和十一年七月一日發行

第二卷 第七號

正淨

七月號

法然上人鑽仰會發行

高島米峰序

島影 盟 著(最新刊)

四六判 價一圓 送十錢

現代人の疑似宗教の真相 觀たる擬似宗教の真相

教養ある現代人の間隙に、粘着蠢動する迷信、擬似宗教を撮み取りて白日に曝した快著！

……こんな擬似宗教はどうして出来たか
……佛教系、神道系の擬似宗教は何か
教義内容は、どんなカラクリで出来てゐるか
擬似宗教は社會に如何なる害惡を流してゐるか

大本教、ひとのみち、天理教、金光教、

生長の家、墓相等を始め、悉皆の擬似宗

教を挙げ、神憑り、

御筆先、神諭、神寶、

神符、豫言、奇蹟、

治療、經營、等の暗

黒面を徹底的に抉る

高島米峰氏推序

擬似宗教の根は深く、その本體に觸れること容易ならず、此時本書の出現は正に劃期的である、著者は迷信の研究に精進する新人にて、今回その矛を擬似宗教に向け、徹底的絶滅を期すものゝ如くである

佛敎社會學院編輯(忽七版)

新興宗教似批判

▼堂々權威の批判陣

△新興宗教批判 文學博士 推尾 辨匡

△邪教は何故繁昌するか 高島 米峰

△擬似宗教は人心を蠱毒す 加藤 咄堂

△謂る邪教の敎學的批判 石津 照星

△精神病學から見た邪教迷信 元九大敎授・醫學博士 諸岡 存

△醫學上から見た邪教迷信 醫學博士 近藤 乾郎

△醫療の社會化と邪教迷信 內務省技師・醫學博士 黒田 敦慧

△類似宗教と疾病治療 前東京診療所長 高山 峻

△醫事政策上から見た邪教 日本醫事新聞社長 松葉直三郎

△宗教と育と邪教迷信打破 陸士敎授 大村 桂嚴

△淫祠邪教の國法的觀察 駒大敎授 伊藤 道學

△新興類似宗教の一批判 淺野 研眞

エセ宗教
顔色なし

剔抉のメス

四六判 三二〇頁
定價 一圓 送十錢

發行所 東京市芝公園地七ノ十
大東出版社 振替東京 一九四七一

大正大學教授 岩崎敲玄先生著

佛教史

菊版 總 クロース 裝
上下二卷、各約四百五十頁
コロタイプ版四枚寫眞版三枚挿入
定價 上卷 金參圓 送料貳拾貳錢

内容

佛教史の既に刊行せられたものは、決して少なくないが、多

くは諸國各別に製せられたもので、印度を初め佛教の流布した諸國全體を網羅したものは無い。然るに本書は佛教の母國印度を始め、錫崙、南海及び西域諸國、支那、西藏、朝鮮、日本等凡そ佛教の信奉せられた諸國の二千五百年間に於ける百般の史實を網羅して餘す所なく、實に全佛教史の完成といふべきである。其の叙述は平易簡明なれど、悉く典據を示し、又要點には原文を引用して研究者の參考に備へてゐる。且つ單に史的事實を羅列するものではなく、其の間常に著者の深き信仰が發露し、佛教に依る精神修養には、必讀すべき重要な書たるを失はぬ。佛教研究家も、佛教信仰者も、皆一部を座右に備ふべき好著である。

(第一篇) 釋尊の成道、佛教初期の教團、佛典結集、阿育王の佛教宣揚、佛教の分派、迦膩色迦王の佛典結集、婆沙結集以後の佛教、大乘思想の興起、佛教の寫字聖典の成立、實相論の起原及び發達、緣起論の起原及び發達、密教の起原及び發達、印度の佛教藝術、印度佛教の衰運、錫崙の佛教、南方諸國の佛教、西域諸國の佛教。

(第二篇)

佛教の東漸及び初期の翻譯、三國時代の傳譯及び宣布、西晉の譯經及び教化、東晉の譯經及び法顯等の入竺、阿含及び毘曇の傳譯、道安慧遠の佛教佈宏、法華三論等の傳譯及び研究、大本華嚴經の傳譯及び研究、東漸初期の像寺造立、小乘戒律の傳譯、涅槃經の傳譯及び研究、大乘戒典の傳譯、淨土教經典の傳譯及び流通、地論宗及び攝論宗、佛儒道の三教調和説と排佛、天台宗の大成、三論宗の成立、南北朝時代の佛教工藝、三階教の興起及び衰亡、禪宗の傳來及び相承、華嚴宗の創唱及び流傳、四分律宗の創唱及び義淨の入竺、玄奘の入竺と俱舍唯識兩宗の成立、兜率上生思想の起原及び傳播、密教經典の傳譯及び宣布、唐代の淨土教、唐末及び五代の排佛、唐宋時代の異興、趙宋の諸宗復興、元代以後の傳通概況、西藏佛教の狀況、朝鮮の傳通概要。

(第三篇) は日本で、近日中發刊。



大正七年

◇ 浄土 第七卷 七月號 目次 ◇

・ 表紙

當麻曼陀羅

・ 目次カット・扉

青柳喜兵衛

説苑

行誠上人の歌

眞野正順 (二)

佛法僧の話

慈悲眞鳥

風來寺 服部賢成 (一四)

靈鳥雜話

松原晃 (一六)

宗教と社會と救ひ

彼等の凡てを活かせ

佐藤春夫 (一六)

鎮西上人を繞る人々

江上秀靜 (一八)

—— 永阿作阿 ——

信仰 奇譚

彌陀ぎつね

吉田初太郎 (一九)

信仰人を語る

誠に生きる人

窪川旭丈 (二四)

信仰の隨筆

授かりし智慧

倉田百三 (二〇)

信仰 相談

(四三)



平家物語 竹の編戸……………畠四郎(六)

隨筆 俗行者と一茶……………奥平祥一(四)

こどもの
じょうと
海の鬼が法然上人
の舟に出た話……………佐藤春夫(三)

家庭 奥様と女中さん……………(六)

夏の景物と川柳……………代田重雄(二)

大衆小説 千手観音……………小島健三(五)

隨筆 如來の國……………上中甲堂(七)

信仰 濁流に祈る……………鶴田湛泉(三)

法語抄 講義 あふひ草……………中村辨康(四)

歌壇……………與謝野晶子選(三) 俳壇……………木村架空選(五)

編輯後記……………(七)

金屬原色肖像

皆の肖像を永久に傳へませう!!

寫眞よりも畫よりも永久的で而も藝術的です

特

長

- (一) 金屬性なること。故に火災水災等に消失せず
- (二) 寫眞をそのまゝ獨特の腐蝕法によつて現はす
- (三) 畫よりもつと鮮かな色が出て褪色變色落剥しない様に獨特なる焼付彩色をしてゐる。而も藝術的
- (四) 保存中の手入が簡單で誰にも出来る
- (五) 價低廉なこと

説明書贈呈

記念品等には最もよいものだと思ひます。尙像ばかりでなく畫・書等も現はすことが出来ます。

説明書を必ずごらん下さい。



東京市小石川區新諏訪町二番地

大日本金屬美術工藝社

工場

第一製作工場

(電話) 小石川 (85) 四八二九番
(振替) 東京一〇一七六七番
東京市本所區厩橋三丁目一番地
(電話) 墨田 (74) 四二四五番

肖像入金屬永代位牌

金屬原色肖像を巧に位牌に應用し更に御法名を彫刻し、

「肖像入金屬永代位牌」

を創案致しました。皆様に直ちに御採用下さい。そして祖先尊崇の誠をお盡し下さい。

專賣特許實用新案
登録出願壹七〇〇九號

説明書贈呈

直にお申込下さい

淨土

七月號

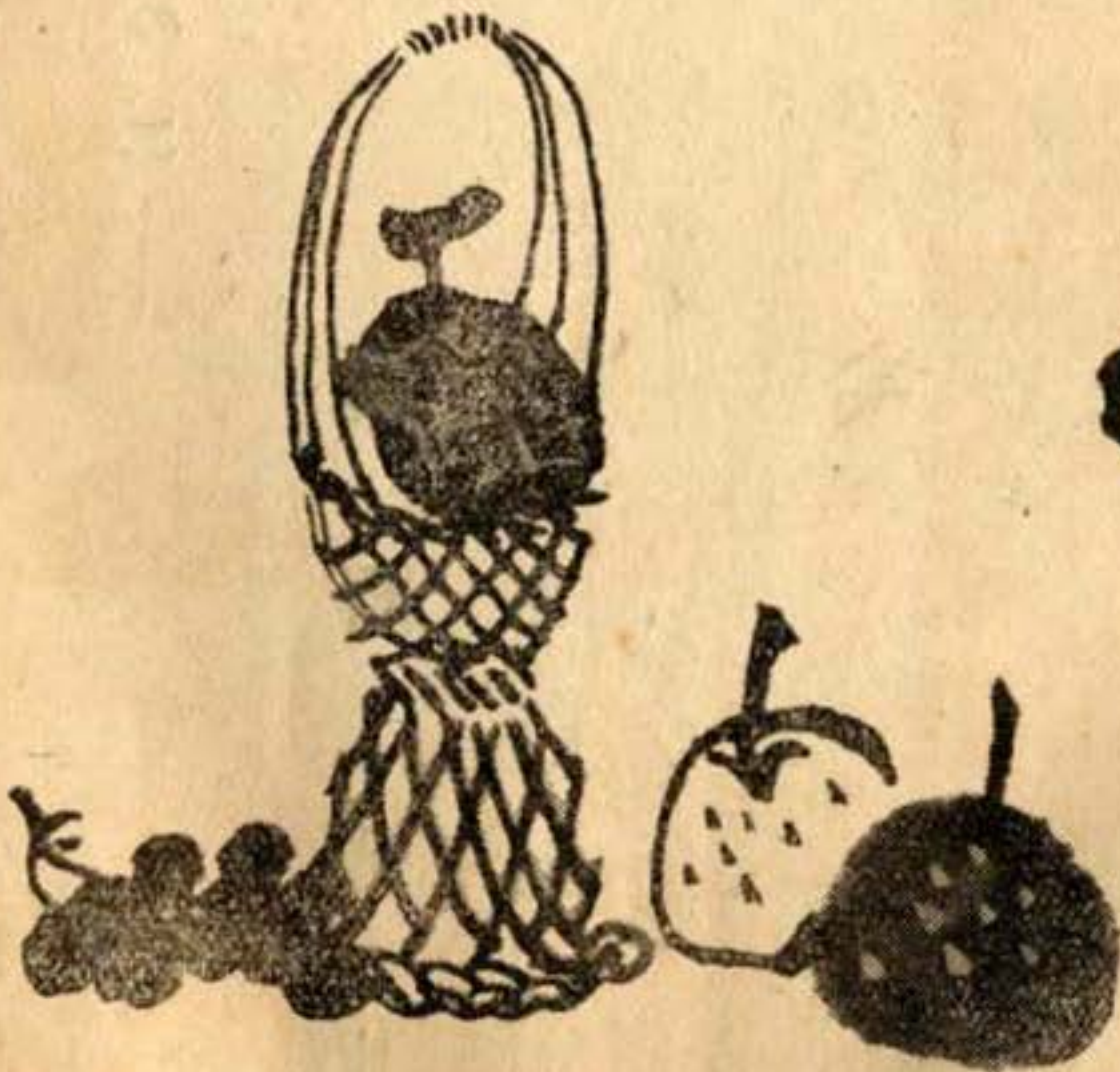
聖人の申す念佛と

在家のものゝ申す念佛と

功德ひとしくして

またくかはりめあるべからず

法然上人法語抄 一一八





行誠上人の歌

— 芝園雜話その二 —

眞野正順

明治時代の高僧といへば、誰れもまづ指を折つて「増上寺の行誠」と數へはじめらるであらう。

すこし高く突き出た眉の骨から、白銀のやうに輝いた毛が左右に伸び、細そりと面長な顔にすこし皺を帯びて、きつちりと唇が上品にむすばれてゐる。見るから神々しく鶴のごとく瘦せた全身——はその中に當時、怒濤のごとく襲來した明治の排佛棄釋の狂瀾の中に毅然として立ち上り、狼狽え騒ぐ衆侶等を制して、大法護持の大旗をかざして眞向に進んだあの烈々燃ゆるがごとき氣慨がひそんでゐるか。——とも見えぬ弱々しく靜かである。

上人は、徹頭徹尾「道念の人」であつた。遠く古を超えて

現在の我等を貫き、また未來にわたつて遙かに走るところの、輝く「佛道」こそ、上人の生命であつた。道を思ひ、ひたすらそれに殉ぜんとする純情は、上人にとつては、その天賦の素質のごとく、なだらかに、かつ自然であつた。そうしてその純真きわみなき性情こそやかつて幾艱難にせめぎ合ふ護法運動の中におのづから信賴を一身に集めて、その精神的樞軸にと推し出されて行くことになつたのである。

その一毫の私心の影だにも落さぬ純朗なる氣稟は、またひるがへつて澄明、白珠のごとく一切萬象を映す澄んだ眼でもあつた。生涯その手より經本を離す日はなし、と傳えらる博學の齋す公正の識見は、その遺著の中にいつまでもその無比なる輝を



残してゐるのであるが、折にふれてその心情を示す詠草もまた水のごとく澄んでゐる。上人には、歌を作るための師は無かつた。たゞ自づからにその天眞の風情を動かすもの、一つ／＼が現はれて天成の珠玉をなしたのである。

法のため身をすて小舟おなじくば

この荒磯にくちねとぞ思ふ

みづからその歌集の巻頭に撰ばれてゐる。おそらく激越せる排佛の狂瀾のたゞ中の作であつたらう。

すでに法城の門は碎かれ、衆侶散亂して城内の狼籍その跡もなく、こゝに永遠のかなたより天づたふ大法の燈は、今ぞまさき消えなんとしてゐる。そこに孤然としてひとり地に影を落して立つもの、それは我身である。

大法の教ゆるところは、たゞ一つであつた。すなはち、たゞ「捨」である。人はまことに生きんがためには、まづこの身を捨てねばならぬ。まことに、自らを捨ておはる時、人はじめて己れを生かす事が出来る。

そのやうに、また、茲に大法を護らんとする己が行方もまた「捨」の外にはない。護らんが爲めには、まづこの身が捨てられねばならぬ。

そこに身を捧げる人間の油なくて、どうしてこの大法の燈は燃えつゞくであらうか。今絶えなんとする法燈の瞬きの前に、それを護らんとするものゝ道は一つである。この荒涼たる排佛の荒磯は、むしろ潔き男子本懐の場所であらう。

——瞑目して天を仰ぎ、唾を呑んで堅く口を結んだ上人のやや蒼白い顔はこの一聯の句を通してまざ／＼とこゝろに浮んでくるのである。

み佛の道おはかれど捨といふ

一筋よりやおもひ入りけむ

「捨てる」といふことを人は好まない。なぜならば、捨てることに依て、それだけ自分が空しくなり淋しくなるからである。しかしながら、眞には身を惜しみ物を惜しむものこそ、却て己れを死なすものである。形を守つてそのために生命を殺してしまふからである。

この身や所有物の形の中には、生命はない。生命は絶えずそれを通りぬけて、ぬめ／＼と新らたに輝きながら生き進んでゆく。たとへば夏草の上に白く置かれた蛇の殻のやうに、眞の生命は絶えず、嘗てありし己れが姿の殻を後に脱ぎ残しつゝ新らたに生れ更つてゆくものなのである。



やがて、捨てられてゆく現在の地位、現在の落積。それに何時までも執着してゐる者の危い哉、おのづからなる生命の道に背いて、己れはいたく衰亡し、物はおのづからに散り去りゆくを見るのみであらう。

眞實の門は「捨」にはじまる。それは、たとへば高樓の高きより一身を躍らして、ざんぶと煌く白銀の溶波の中に突入してゆくかの如く危くかつ崇峻であるが、かくてやがて輝く眞實の波に身を任せ切つた時、人は初めて眞實の世界に參じて、こゝに吐き吸ふ己が氣息の眞の意味を知りそめるであらう。

——まことの生命の道は、すなはち、宇宙眞實の開闢であるからである。

たちかへる道まどふらむ霜さゆる

枯野の原にきつね鳴くなり

しかしながら、人のこゝろは絶えずこの身と物とを惜しむ。

それは果敢なく影のごとく逝つてしまふものでありながら、それを護らんとして何かしらにいつも怖れてゐる。それは、たとへば枯野に出て、あたり周圍に絶えず不安の首を動かしてゐる野狐の姿に似てゐる。

このものを失はんことを怖れて、絶えず不安に壓迫され、狐疑とせはしなき配慮とに迫はれつゝ、其日々々を生きて行く。かゝる間に、わが生活の世界は、次第に生色を喪つて蕭條に

る枯野となつてくる。吹き過ぐる霜風の暗きが中にいつか立返るべき本然の寛きの世界をも見喪つてしまふ。

かつ恨みかつ招きつゝ、葛尾花

おなじ夢野にたち騒ぐらむ

定めなきものは、外界の姿のみではない。内に蠢いてゐるわが心でさへも定まるところなく遷り過ぎて行く。

人はたゞ自己を中心とした愛欲の眼をもつて他を見へ。求めて満たされぬは、人の眼はたちまち怨恨の冷たき光を發する。しかしながら、深く恨んで閉ぢた唇も思ひがけず己れの利をそれより受くるときは、忽ち綻びて双手をいそぎ其人にさし出すのである。

かつ恨み、かつまねきつゝ、果てしなく遷りゆく己が心の幾變轉も、かへり見きたれば、たゞ愛欲を根として細々と伸びし細莖の定めなき起伏に過ぎない。右へ左へと揺れつゝ時を移す己が姿に、人は遙かなる路を踏んで來たか、とふり返つて見るけれども野草の心は同じところに、何時迄も同じやうに揺れてゐるに過ぎぬ。

枯れやらぬおのが古根の生ひいで、

今年もさわぐ蘆のみだれ葉

愛慾の古根は斷ちがたい。それは思ひ斷ちたりと見えて、ふたゝび復た、その新來の芽をもたげ返すのである。掌までし



て塗り垣す心の地を、ふたゝびその内より破り裂かるゝ暗き悔恨、その憫ましさに人はいく度か泣くであらう。

断ちがたきものは、断ちがたきがまゝに捨てよ。それは避けがたき地の宿命であるからである。断ちがたき宿習の骸は、それに向つて與へつゝわれは翩然と踵をひるがへして、新たな眞實の天地へと向きゆけよ。

いたずらに音ばかりしてむら蒭の

葉末にとまる風なかりけり

まことの生命の眞諦は、飄々としてかゝる葛藤の上を超えてすぎゆく風の如くである。

それは滞まるところもなく、流れて一切を貫き、絶えず一切を生かしつゝ過ぎてゆく。復たそれは絶えず己れの内より超えて出でて盛上りつゝ己れを輝かす、かの清冽なる噴泉のすがたに似てゐる。

げに空逝く風と流るゝ水。それはまことに生命の嚴そかなる象徴である。——手に一笠を執つて、行雲流水にまぎれ入らんとした古の求道者の淡々たる心根の憎さよ。觸るゝところの物を捨て更に捨て、捨て／＼しつゝ觸れて來し一切のものをその本然に生かさんとする。

——されば、秋風、水のごとくに野を行けば、その時野草は一齊に白銀の輝を亂したのである。

説く法の聲とも知らず今日までは

空ふく風と聴きすぐしつゝ

大法は嚴として常恒にわが目前に立つ。

それを知らざるは我が眼、盲たるからである。わが耳、聾いたるからである。わが眼を閉し、わが耳を塞ぐところのものは、こゝに假なる自己の骸を守らんとする小さき情の迷である。

眼を擧げて天を見よ。そこに颯々として過ぎゆく風は、やがて大法の身自ら示し賜ふ、嚴かなる眞諦の説話である。伏して地を見よ。そこに絶ゆる間もなく潺湲と流れゆく水は、やがて我身の踏みゆくべき眞實の道を常に奏でゝゐるのである。

南無と思ひ阿彌陀佛がいふ外は

いふ事もなし思ふこともなし

一切を捨て、眞實にのみ入ることはすなはち「南無」の世界である。瞬時の假の姿を離れて、歸するところの永恒の生命とはすなはち阿彌陀佛である。

思ふことなく、言ふこともなく、たゞひたすらに純一に大法の礎に歸し奉るとき、はじめてその人の生活は揺がぬ永遠に一致するのである。

社 會
と 救 宗 教

彼等かれらの凡てすべてを生いかせ！

— 信仰があつたら死ななつたかも知れぬ —

情死事件に就て佐藤春夫氏との一問一答

(記者) 近來心中が非常に多くなつて來たやうに思はれますが、これは勿論社會的な事情によるところも多いてありませうが、思想的に安定するところを持たない、と云ふことも重大な原因ではないてせうか。これをどう云ふ風に見るのが正しく、それに對する救ひと云ふのはどう云ふところに求めたら良いのてせうか。

最近自殺者が多くなつたのは事實でせうが、しかし特に心中が多くなつたかどうかは少々わかりかねますね。新聞や統計などで心中(情死)として取扱はれてゐるもののなかにも、本當の情死ではなく普通の自殺者が偶然にも男女二人である場合などが想像されるのです。或はまた相思の男女が思ひどほりに結合できないといふ理由だけではなく、それは

ほんの動機でそれ以外に或は病苦、生活苦などが眞の原因になつてゐてこれだけでも自殺しさうな状態の人が異性の無力な同情者(これを援助する力のない人)を得た場合等をも想像します。これ等のすべて——異性或は稀に同性が時と所を同じくして死ぬのをすべて情死と云つて言へない事もありますまいが所謂心中とはいくらか趣が違ひはしますまいか。僕は相思の戀愛が外部の事情のためにその戀愛の成立が妨げられた絶望で男女の死を擇ぶ場合を純粹な心中と見て、その他の場合は複合自殺とでも名づけた方が區別しやすいと思ひます。もう一度説明すれば僕のいふ

心中は假りに重複失戀自殺と名づけてもいいものです。さうして普通の失戀自殺は相手の意志が同感しないための根本的失戀ですが、重複失戀自殺(心中)の場合は、當事者相互の意志は結合してゐながら外部の事情がこれを妨害する特殊の失戀自殺でせう。従つて戀愛の當事者の死は當事者の意志を阻止する外部の事情に對して挑戦し復讐するやうな氣持から決行されるものと看做していいかと思ひます。こんな事を小うるさく考へて來ると近來果して心中(眞の意味)の多いかどうかが疑はれて來ます。寧ろそんな純粹な氣持なのは昔より稀なのではないかと思はれて來ます。

だから一緒に現世を厭惡して來世に希望をつ
なくなどの心持もなく、ただすてばちな男女
がすてばちに死ぬやうな悲惨なのばかりで、
近松物などで見るとやうな羨望すべき心中など
はきつと絶望でせう。それだけに現實的な他
の理由が多く含まれてゐるに思ひます。失
戀自殺の複雑なものとするべき無理心中など
は別として純粹に戀愛のために死ぬのなどは
當世きつと勘いと考えられるわけです。従つ
てその原因を知悉したら救ひ得るものも幾分
はあるかも知れませんが何しろ當事者は恥を
忍んで事情を打明けて相談するところも勘い
のでせうしせいぜい搜して相談して見ても終
に了解されない結果、仕方なしに死ぬものと
しか思へません。南無阿彌陀佛と稱へて淨土
に再生の希望も持つてゐない現代の一般の自
殺者は氣の毒至極です。もし何等かの信仰が
あつたら死なないでゐるかも知れないのです
宗教の信念も無論これを救ひませうし、そ
の他の信念でもいいのです。
特に心中と言はず一般の自殺者の場合、生

命はこれを自個の祖先や天から與へ預けられ
たものでこれによつて社會に捧仕する義務の
あるものといふ觀念が現代人には殆んど絶無
でせう。さうして生命は自分のもの自分のも



外部事情で戀愛の成立が防げられ

のだから自分さへ承知なら好き勝手に處致し
ていいといふ風な考へに傾いてゐると思ひま
す。特に妻子のない青年などにはこれが多い
でせう。妻子などがあるとさすがに自分の生
命を自分だけのものと考へないで妻子なども

幾分考へに入れるので、おいそれとは死なな
いわけです。それ故青年の男女などに生命は
自分一個のものではなく他から一時預けられ
てゐる大切なものといふ觀念を植ゑつけるこ
とが出来さへしたら自殺者を最後に思ひ返さ
せるのに役に立つだらうと思ひます。

この方法やこの觀念に何が最適であるかこ
れは私どもではまだ十分に解決がつきません
之を要するにあまりに虚無的になりすぎた
現代人の生活に何か據りどころを與へよ。と
いふ事になります。その指導精神に就ては大
問題ですから、今簡單には論じ盡せませぬ。但
し宗教家などは當然その任にあるものと思ひ
ますから、既成宗教によつてもし不可能なら
新しい道でも何でも指示するに努めるべきが
當然でせう。自殺者は外面生活に行きづまり、
内面生活に彷徨せる一般社會情勢の反映であ
る。自殺者の間、偶 同伴者のあるのは人類
の同類愛の衰れた發現である。努めて彼等の
すべてを生き得るやうにさせてやりたい。彼
等とても決して好んで死ぬのではあるまい。

永阿と作阿

(一)

文治元年の三月、平家の一門は壇の浦の浪と亡びて、天下は頼朝の手に歸したものの、亂後の殘黨はまだ彼處此處に忍んで居た。

筑後の國司草野太郎永平は頼朝に召されて鎌倉へ行く途中、難波に於て京都亂るの報を聞いて勢立つた。しかし旅に疲れた軍地理にも馴れぬ。士氣のみの頼りに無謀な軍も出来ぬ。先づ平野に詣り若宮八幡を拜して戰捷を祈願した。

もしこの戰に破れたならばもはや鎌倉への見参もなりがたく、さ



ちとて郷里鎮西の地へも歸れぬ。京洛の弱兵何者ぞとあなどつて居ても、一軍の進退は重大な運命に直面して居る。

併し戰は一戰に決した。荒れて進む鎮西の兵の前には、一閃の火花を刃に止めたに過ぎなかつた。

筑後太郎來る。鎌倉に着いた兵は京亂鎮撫の功を語つて威風を添えた。遠く鎮西の涯から月餘の旅を重ねた草野太郎は、かくて頼朝公に見参した。

『長の旅路、お疲れもあるのに、殊に平氏の殘黨が京洛を騒がした時は、そなた一戰の下に鎮撫して下すつた由、時勢未だ定まらぬとき、各地の小亂はやがて大亂誘起の因をなすものなるに、全くそなたの功を以て大事とならず祝着至極、頼朝厚くお禮を申します。』

頼朝の機嫌麗しく、遠來邊土の豪士に禮を以て遇した。草野太郎が鎌倉に滞在中頼朝は天聽を請ひ奉つてこの勇士に采地「三千石と官女二名」とを賞與した。

「瀧つ瀬さま、旅は淋しいやうなまた珍らしきものでございます」

「ほんに私ひとりならばどんなになか心淋しいことでありませうに、井出水さまとご一緒で、何より心強うございます」

「昨日までは、都今日は筑紫の旅——」

「これから二人、死ぬまで二人、どうぞお見すて下さいますな」

官女「瀧つ瀬」と「井出水」とはかくて草野太郎の旅を慰めながら、筑後の國へ歸る身となつたのである。

城主の歸國、恩賞を受けて歸る城主の行列は盛んな出迎えを受けて、その居城「武井城」に入つた。

「おい、見たか、美しかげなの」

「みやこのお姫じやろ、美しかのなんのて——あれが龍宮の乙姫ぢやらうたい」

「ばつてか、武井城の奥方がちと氣にさつしやろ？」

噂の方が早かつた。草野太郎が入城する前に、太郎の奥方は心穏かでない。はしたない心よと幾度か自ら撫めて見たものゝ、やがては嫉妬の炎に自制し切れず、家臣に命じて侍女瀧ッ瀬と、井出水とを拒んで入城せしめなかつた。

はる／＼と筑紫路へ來たのも、頼むは武將草野太郎永平の人であ

つた。旅の空は淋しい。風俗も異り、言語も通じそねる土地へ來たのもやがて一城の主にして花やかな日を送るのを樂しみとしたことであつたらう。而も夢は早くも破れて悲しかつた。草野の里に登る一步前で二人は民家の一室に閉ぢ込められたのであつた。

軒先に浮んだ耳納の連山が、屏風を立て廻したやうに見えるその中に、武井城に不夜の炬火が輝いた。それは城主の歸館を祝ふ酒宴の夜であつた。杉の森の揺がしてどつと崩れる歡聲は、二人の女の心にはさもあざけりの聲と聞えるのである。

旅の疲れも休めず、憂ひの双眼に涙ぞ光る。二人の女は南嶽を極めて、北の空を眺める。彼處に見えるのは天拜山か、寶滿の山も吃立つた、その墨繪の如き山が、女の魂を空洞にする。ふと見れば木立の間を縫ふて流れる千歳川。道一筋の向方を見ゆるからに、二人はそゞろありき、音もなく連れ立ちて川邊へと出る。

「瀧ッ瀬さま、この川上は京洛から流れるやうに思はれます」

「さても京洛がなつかしくてなりません。生きてこの恥見んよりはいつそ死にたうなりました」

「ほんに二人は死ぬるまで二人、不仕合せの私たちはこの川浪に身を沈めて、筑紫、不知火の海に旅立ちませう。」

深紅の紐で結ばれた二つの魂は、はかなくもこの川に紅の波紋を残して沈んで行つた。

× × ×

× × ×

お上人様、私は死んだ二人の女がいとしうてならず、毎日心樂し
まず居りましたところ、妻も二人の死を聞いてから、むげにもつれ
なかりし我が心を責めて、どうかして二人の魂も慰めてやりたく
又そのまゝにして置いては鎌倉への聞えも憚あること、それから
私達は城下に「龍泉寺」を建立したのであります。きつと二人の女
も成佛して居てくれることと思ひます。私も時にかの寺へ参詣して
供養を致して居ります。

お上人さま。私共の罪障はこれで消滅したことを思ひますが如何
でございませうか。

——草野太郎永平、今は鎮西上人に歸依して自らの法名を永阿、
妻は作阿と號けられて、上人の弟子となり、念佛の人となつてゐた。
鎮西上人のお答はしとやかに、しかし乍ら強い語調であつた。

「お寺を建立されたことは二人の官女のために善き手向けではあり
ますが、でもそれで盡しが届いたといふのではありません。願は
くはそれにつけてもお念佛を進められる事が何よりの所詮であり
ます。造塔建立の儀もお念佛の中に回向せずば目的を失ふもの
であります。死者も活かされるし、生ける者も命づけられるのは
念佛の聲であります。南無阿彌陀佛々々々。」
嚴たるご指導に永阿、作阿の二人は鎮西上人を拜するのであつた。

(二)

吉木よいとこ

苗木が育つ

植えた蒔柿

甘くたる

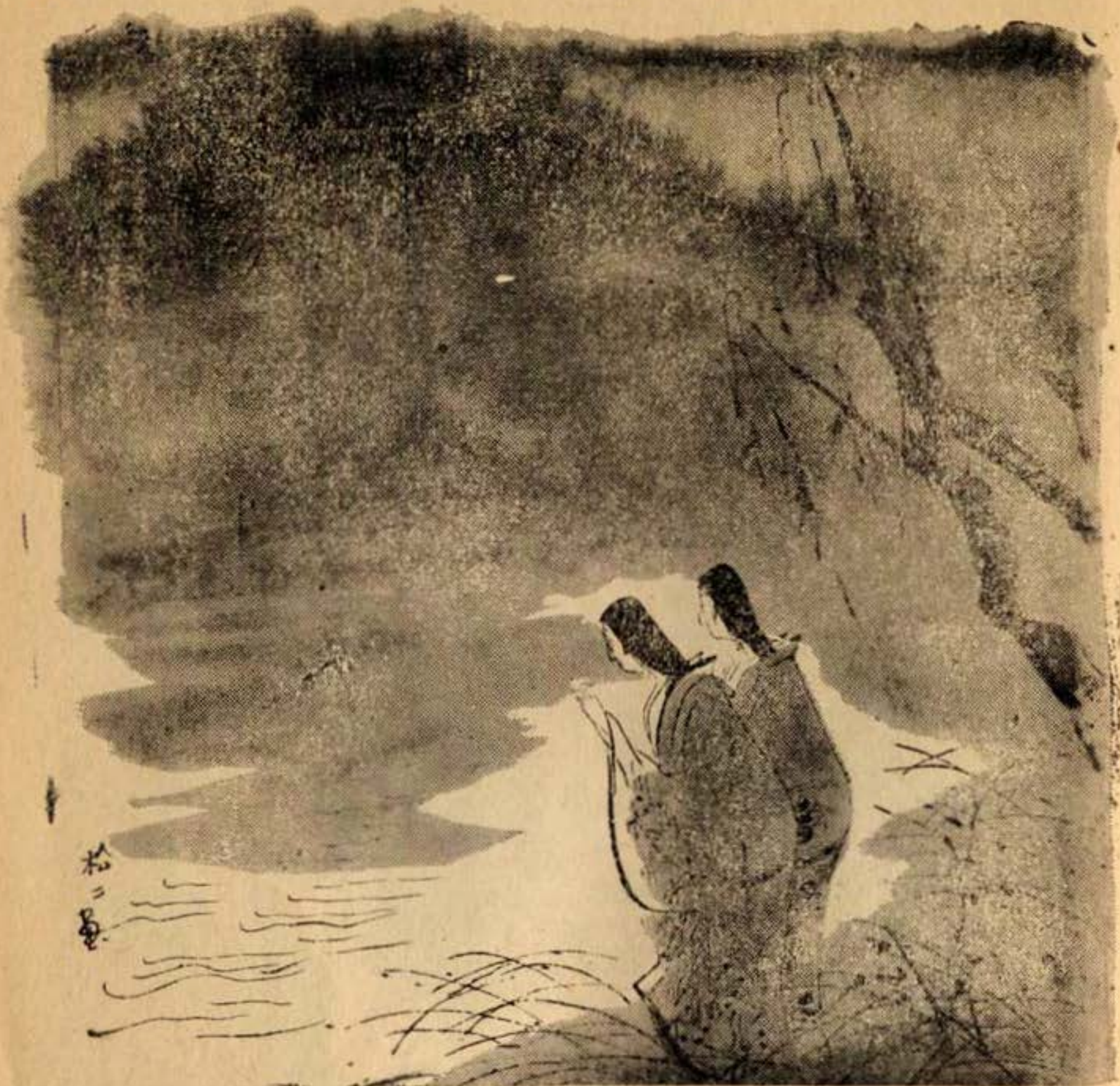
武井城下の吉木の邑は大杉の森、榎の並木、竹林と、樹木繁茂の
山村である。爪先上りの登りは三丁そこは若宮八幡宮、社の山續き
に陽善寺、少し離れて善長寺、寶藏寺の寺々がある。

戦亂の禍はおぞましい。過去幾年か、主君の爲めに討死した亡
魂を弔ひ、かつは城下の住民愛撫の心で、城主草野太郎が建立した
寺々は數多くある。

雑草の生ひ繁つた石塊の道を、念佛唱へつゝ参詣する爺一人、本
堂の前に額いたとき、今しも看經を終つて縁先に立たれたのは三十
一歳の鎮西上人であつた。上人は筑前國、油山の學頭として名譽高
き人であるが、遊化に足を運んでこの地吉木の邑に留錫して、善長
寺、陽善寺と各寺々を念佛して参られるのが日課であつた。

陽善寺は眺望佳き山腹に在る。

「お上人様。ありがたいことにや、この頃うちンもンが皆お念佛を
唱へるやうになりましたはい」



「興作どんと云はつしやつたか。あそこの——それうら——あの紫の雲の流れてるあたりは何處でござつしやうかい」

「あれア勿體島から西、井上原あたりでつしやろ

——ない」

「杉の木立、白い水、その上に紫の雲、まことによか眺めですたい」

「上人様眺めはよかばつてん。悪るかことにや、盜賊が居つて、近所の田のもの、畑のもの、何でも盗つて困つて居りますばい」

興作の話では井上原に盜賊が居ると云ふ者もあるし、又大蛇が居て夜になつて近邊を荒らすともいふ。夜になつて炬火の光が二つ輝くやうに見えるのはその大蛇の眼玉が光るのだとも噂する。

しかし上人は杉森の上にたなびく紫の雲、何となう心をひかれて、翌朝は一人でその森へと遊化せられる。

まことに静寂な境地、百年を過ぎた大杉、大松、又は空に覆ひかぶさつた大楠、晝なほ暗くして而も樹間に坐せば、何處からともなく光明のさして落ちついた晴れやかさである。

森の中の古井戸、これには清水深く湛えて、こゝぞ空の紫を喚ぶ吉相の地である。井上の原とはこの井戸から取つた名前である。

夫れ心は俗塵を拂ひ、静寂の境は禪定に適す。たゞ是れ千古の自然、暫時此處に念佛の座を構えよう。上人は吉木の陽善寺へは歸らず、そのまゝ此の地に庵を結ばれた。

かつて聞く、大雄は居坐を起たずして十方を化益するとか。上人の念佛の聲は鳥を呼び、梢を動かしたのみか、吉木の興作が噂したその盜賊が第一に現はれて上人の前に跪座した。極悪の夜盜の心には常人以上に響いた念佛の聲であつた。

上人は彼が爲めに剃度の作法をして念佛の弟子とされた。

このことがいつか近邊に傳はつて教化に接するもの日増しに多く、遂に噂は武井城にまで聞えた。



ある日草野太郎は臣下を連れて井上原に來り、かつて聞く油山の學頭、今面のあたりその風格に接して拜座した。太郎が武を以て退治せんとした夜盜は更にその居所さへつきとめずに居たのに、今上人の傍に侍して、忠實に給仕する荒法師の從順さを見て僧格への敬虔さを催さしめられた。

馬を返した草野太郎は日を期して、妻を同道して上人を訪れた。さきの日官女二人につれなくて之を自殺せしめた妻女も、今は主人と共に上人より三歸戒を授けられ、太郎永平を永阿、妻は作阿と道號を賜ひ、念佛の信者となつた。精氣のこもつた上人の聲はいつはてるともなく、世は平和な建久三年の春である。上人の前に拜聴する永阿夫妻は、一意念佛更生ののどかさを味つて居る。

歌壇

與謝野晶子

○ 京都 小山 繁

果てしなき野の夜は明けてあな
めでた無限に續くわがいのち見

評 信仰を得たる人の歡喜を云ふ
にふさはしき強き調子の自ら
出でたりと見えてよし。

○ 東京 高橋 美智

何ごとぞ白蓮折りて生けたれば
造り花にも似て悲しけれ

評 自然のままに置くべしといふ
教へも顯はには云はず、目に
見たる新しき感じ方をもて歌
へるがよい。

○ 長野 中山 弘

形なき垣をみづから作りつつ人
に離れぬ永く病む身は

評 同情を禁ずる能はざる作。

○ 徳島 神原 梅

たぐひなきみ法に逢へば物すべ
て満ち足らひたる心地こそすれ

○ 滋賀 本間 秀道

邪の人に押されて過ごす日の
多きがままに世の悲しけれ

○ 岐阜 奥村 靖雄

仄かなる淨域の灯にさくら花夢
かと浮きていみじかりけり

○ 北海道 花田 順往

世は悲し昔の友も大方はわれに
先き立ち亡き數に入る

○ 山形 江ノ目達雄

鶯が雨の中にて歌ふなり若葉
垂り暗き溪底

○ 滋賀 佐々木孝純

亡き祖父の植ゑし牡丹の花咲き
て薫る夜にわれ物の思はる

○ 岩手 藤原貞二郎

静かなる今日といへども降る雨
に櫻の花はみだれけるかな

○ 東京 安良岡 昇

友逝けりあきらめがたく偲びつ
つ我が寂しさの深くなりゆく

○ 朝鮮 青木 猛

われ家の貧しきままに小學も終
へず仕へて人の飯はむ

○ 滋賀縣 垂井 洋

母上を悲しませつつ此の道をゆ
く身は寂しいつ知らるべき

○ 大阪 小山 文二

おのづから心ひらくる心地すれ
日の出をろがむしののめの海

○ 小倉市 益田 慧光

萬歳の喚呼を浴びて兵は死を
思はざるなし滿洲へ行く

○ 三重縣 大野 歩行

夕風に靡く五月ののほりをば斜
に切りて飛ぶ燕かな

○ 宮崎縣 山本 清行

その昔神武の帝み舟出のあとに
輝くみ光の塔

○ 愛知 壽臺 芳月

信濃川春の流に棹して魚取る人
の霞みて見ゆる

廣島 川田 信嶺

空啼れて社の櫻しづかなりその
もとを行く女學生ども

○ 香川 横江 史枝

旅を行く子の上思ひ安からず明
日の豫報をラヂオにて聞く

○ 廣島 上原 抱地

西風し晴なんとするこの朝裏山
に啼く鶯の聲

投稿規定

一、用紙は官製ハガキ、一回

一人三首以内のこと

一、文字は改書で明瞭に、「應

募短歌」係宛お送り下さ

い

本歌壇も讀者のたゆまざる精

進と、選者與謝野先生の御熱

心な御推蔽とにより獨特の精

彩を發揮して参りました。

而も今月からは先生に特に御

願ひして御覽のやうな評をつ

けて頂くことになりました。

尙一段の輝きを増した事と思

ひます。(係)

佛法僧の話

慈悲眞鳥……服部 賢成
靈鳥雜話……松原 晃

慈悲眞鳥

鳳來寺 服部 賢成

「佛法僧」といふ鳥名の名附親は弘法大師だと云はれてゐる。

大師が入唐して、密教の研究に餘念がなかつた折、一日、清涼寺の山中でこの鳥の啼聲を耳にされた。今までに聴いたことのない音色に、ふしぎな面持ちで大師が傍らの土民に

「あれは何といふ鳥が啼くのか」

と問はれると、

「あれこそ慈悲眞鳥と申す靈鳥です」

といふ答へを受けたのであつた。

大師は歸朝されて、高野をおひらきになるまへに、大和の室生山に一寺を建立された。その室生山の自然に、朝な夕なな精進の生活を送られてゐた折に、ふと異國で耳にしたこの鳥の啼聲を聴かれたのである。そして我國にもこの鳥が住んでゐるといふことを、はじめて知つた。「佛法僧」「三寶鳥」といふ名はそのとき「慈悲眞鳥」をうつした大師の大和名であつた。

その後、大師は高野山で、三河鳳來寺山で

夏の景物と川柳

代田 重雄

蚊遣り

夏の悪魔である蚊軍を退散させるに、今日では除蟲菊で製した蚊取線香といふ結構な物がある。がさうした物の無かつた昔は、糠、銀屑、農家などでは麥殻をいぶしたり、蜜柑の干皮を大切に保存して置いて利用したりした。蚊は烟を嫌ふためなるべく刺戟性の強いものほど効果がある。横井也有などは杉の葉を焚いたやうな事が舊記に見える。

佛師屋は佛の肉で蚊歩いぶし

(文化)

蚊遣火の馳走ありがた涙なり

(寶曆)

等の川柳があるが、今日のやうな結構な蚊取線香の無かつた時代

日光補陀落山で、何れもこの鳥の存在を確められた。

閑林獨坐草堂曉

三寶之聲聞二鳥

一鳥有聲人有心

聲心雲水俱了々

この七言絶句は大師の作として人口に膾炙されてあまりにも有名だが、三寶の聲を一鳥にきゝながら、心耳を澄まし、ひたすら坐禪觀法に餘念ない大師の御姿が、大自然の閑寂そのもののやうに浮き上つて見えて尙い。

*

*

近頃、學者間では佛法僧の存在を否んで「このはづく」が啼くのではないか、といふ疑問を投げてゐる。しかし私の經驗によればその説は成立たない。(このはづくも私の山にゐる)このはづくの啼き方は、ブツ、ボー、ブツ、ボーである。佛法僧は必ずその名の示すやうに、ブツ、ボー、ソー、ブツ、ボー、ソーと啼く。

だが、この佛法僧がどういふ形をした鳥であるのか、未だ誰も眼で見たものがあない。三十餘年の鳳來寺の朝夕に、私もまだいかな

る鳥であるのか知らない。

この鳥は深夜にしか啼かない。山間の溪流に沿うた森林に住まふ。そして極端に光りきらふ。近年高野山でこの鳥の啼聲を耳にし得ないと云ふのは、燈火設備の行き亘つたせみではないかと思ふ。鳥は奥へ奥へと逃げこんでしまつてゐるのに違ひない。鳳來寺一山二十一寺は、二、三年前まで電燈ひとつ引かずには過して來た。現在も、軒燈、外燈の類は一切點じずにゐる。

佛法僧は一説に渡り鳥だと云はれる。渡り鳥なら群を連れて來さうなものである。いつも鳥の数がふえぬところを見ると、渡り鳥ではないらしい。

鳳來寺山は千年來の禁獵區域である。そのためこの鳥にとつても、この地は千古の塲であるのにちがひない。

鳳來寺々中の者達はいつも云ひ合せてゐる。——高野、日光、鳳來寺は佛法僧の住みとして、いさゝかの不思議もない、なぜならこの三山は靈山であるから、と。

だから無理もない。夏の夜店で一把十錢で賣つてゐる蚊取線香、あれは普通の線香の屑を集めて着色したインチキ物で、あんな物はいくらいぶしたつて効果のあらう筈は無い。蚊取線香はやはり高い品の方がいい。ともあれ、夏の夕暮時、打水した庭の椽の端に置かれる蚊遣火なども、さびた江戸情調を持つてゐる。

螢

「月令」といふ本に、腐草化して螢となるとある。昔の人の見解は面白い。螢は夏の夜の景物として甘い少年期の追想を多分に持った懐かしいもの、一つだ。

反古張や似顔で螢追つかける

(寶曆)

あつけない一步が螢飛びじまい

(同)

前句は、反古張の團扇や役者の似顔繪の團扇で螢を追ふ點景で、

靈 鳥 雜 話

松 原 晃

三河の鳳來寺から佛法僧の啼聲の放送に成功をして我々にラヂオの有難さを感じさせたと同時に、深山幽谷の靈域でなければ住まぬといふこの靈鳥が、ブツ、ボー、ソウと冴えた音をきかせたので、一しほ心の清淨になる氣持がした。

佛法僧は、元來が熱帯のもので本種は、

Erystonus orientalis Calonyx Sharp で、

越冬地はアングマン、ビルマ、マラツカ、ジ

ヤバ、スマトラ、ボルネオ、フィリッピンな

どであるが、初夏にかけて、本部亜細亞では

黒流江地方から以南、滿洲、朝鮮及び中部支

那、印度に渉つて來て蕃殖する。日本にも幸

ひ渡つて來て、日光、秩父、富士、木曾、比

叡山、三河寶來寺、四國劍山、青森恐山、九

州英彦山、霧島山などにゐる。

佛法僧は我國では夏鳥であるから、南方諸國から春の頃に渡來して蕃殖し、秋に離れつれて本邦を去るのであるが、中には我國に留まるものもあるといふ。大概高い木のある森林に、棲息をして、一對宛生活し、喬木の高い場所に自然の枯穴を見つけて産卵するが啄木鳥の古巢なども利用すると言はれてゐる。年々、減少すると言ふから、益々珍らしい鳥となる譯である。

昔から佛法僧は、稀有な鳥として深山幽谷に之が聲を訪ねる人は多かつた。別名三寶鳥とも言ひ、靈域と靈鳥が結びついて、古來これほど珍らしがられた鳥はない。

そして之を有名にしたのは、佛教との關係

あえてその團扇で無くとも、吾々の追憶は濃い。後句の縁日の蟲賣りで買った螢であらう「東都歲事記」に因ると、王子邊谷中螢澤、隅田川堤、目黒田畑、目白下通、等が螢の名所で、都下の遊人黄昏より漫遊し、籠中にこれを入れて家産としたやうな事が見えてゐる。東京が膨張して、つひ二、三年前まで盛んに螢が飛んでゐた郊外も、草は刈取られ、田畑は住宅地となるはや螢の姿を見る事は出来なくなつた。草深い田舎へでも行かなければ、ホー／＼螢來いの甘い昔の夢は、吾々の胸にかへつて來ない。

花 火

夏の夜を彩る花火も、夏の夜の涼みには忘れられない、うれしい景物である。大なるは各地の川開きに打ち上げられる仕掛花火から小なるは子供達の弄ぶ線香花火

で、弘法大師の「性靈集」にある、後夜聞佛
法僧鳥といふ詩である。

閑林獨座草堂曉 三寶之聲聞二鳥

一鳥有聲人有心 聲心雲水俱了々

これがために、高野山に佛法僧鳥の聲を探
ねる人が多くなつた。

古來佛教と關係のある鳥としては、念佛鳥
があり慈悲心鳥がある。念佛鳥といふのは支
那にゐる鳥で、「徐氏筆稿」には「華山産念佛
佛鳥、形大如鳩、色黃褐翠碧間而成文、音

國寶 右左權太夫藤原隆信筆

法然上人御影

堅一尺四寸・横八寸
絹本寫眞プロセス製
精巧典雅十數度刷

精巧無比！ 神々しき上人の御影は實
に眞に迫るものあり。上人を景仰し、念
佛にいそしまれる方は是非朝夕座右にか
かけて恭敬せられよ！

一葉壹圓（送料不用）

申込所 法然上人鑽仰會

韵清滑如誦佛聲」とあり、唐韋蟬が詩に「靜
聽林飛念佛鳥云々」とあるのがそれであり、
慈悲心鳥は、日光山にゐると昔から言はれ、
比叡にもゐるといふ。

慈悲心となくてふ鳥を尋ねゆく

道しるべせよ法の衣手

慈悲心と鳴聲きけば鳥にだに

しかぬわが身のはづかしきかな

など歌はれてゐるが、念佛鳥も、慈悲心鳥
も佛法僧のことだといふ説もある。

だが何と言ふても、三寶を唱へる佛法僧鳥
の方が、意味が深く人口に膾炙されてゐる。

「高野山通念集」には、佛法僧は、靈窟の開
林の内にて、雄、佛法となくと雌が、僧と合
すとあるさうだが、眞實かどうか。だが、ブ
ツ、ボー、ソーと啼くことだけは昨年のラヂ
オでも聞いた通りである。

佛法僧を三寶と言ふことは華嚴經に見え、

佛寶、法寶、僧寶、謂之三寶、又住持三寶、

同體三寶、別相三寶、大小乘三寶など、あり

魏草釋老志には「其始修心則依佛法僧之三

鼠花火に至るまで、色とり／＼で
ある。昔は毎年五月二十八日の
兩國の川開きは頗る盛大に花火
が打ち上げられ、江東の空を五彩
の火に染めて、満都の人士を熱狂
させた。今日も毎年七月の川開き
は尙盛んに、股賑を極めてゐる。
花火で思ひ出すのは懐しい玉屋ア
の聲だ。

また玉屋だとぬかすはと鍵屋
いひ

（文化）

鍵屋も玉屋も、江戸の二大煙花
師である。

花火屋はどれも稻荷の氏子なり

（文化）

一方は鍵、一方は玉、どちらも
狐の所持するところのものであ
る。この玉屋鍵屋が兩國橋を中心
に上下へ陣取つて、何れも自家苦
心の花火を打ち上げ競争したの
である。だがその熱狂の聲はいつ
も玉屋アであつた。それは玉屋の
花火の方が優れてゐたからであ

歸若君子之三畏也」とある。又我國の聖德太子の、靈法十七ヶ條の中には「篤敬三寶佛法僧也」ともある。

つまり、鳥が、これを唱へる譯であるから靈鳥といふ譯である。

「日本紀略」には「延喜六年右大臣光修法華八講、佛法僧來鳴」とあり、「扶桑略記」には「延喜十八年八月十四日夜、五條后室松林佛法僧鳥鳴、衆人聞奇異、自去三日講法華經一などあり、中原廣俊は

櫻桃季色花空盡、佛法僧音鳥獨鳴

と詠んでゐる。

佛法僧の歌は、色々の歌集に見えてゐる。

續八葉集には、上醍醐で、佛法僧をきいた念窓上人の

うらやましいかい轉る鳥なれば

御法の外の聲なかるらん

醍醐寺は、有名で、鐘の銘には「山城宇治

醍醐山有佛法僧」と誌されてゐるといふ。

赤染集には鞍馬の佛法僧をきいた

三ながらおもてる鳥の聲きけば

我身ひとつの罪ぞかなしき

といふ歌がある。夫木集には

我國は御法の道の廣ければ

鳥もとなふる佛法僧かな

があり、新六帖には

松の尾の峰しづかなる曉に

仰ぎてきけば佛法僧のなく

松の尾の山の奥にも人やすむ

佛法僧となくにつけても

松尾も佛法僧では有名である。「神祇考」に

「松尾側有三大石、白髮習人坐其上、延朗問

何人來此、對曰、是松尾明神也、擁護師法、

又聽師誦法華、故數來、又我奉師給仕者二

人以是爲信、吉已不見、延朗謂徒曰、二

鳥來馴、子等莫怪、果如三神言、其石尚在焉

爾來二鳥外、餘羽不入寺、」とある。これは

佛法僧のことである。

松尾では、佛法僧が盜賊を捕へた話がある、

「閑田耕筆」にのつてゐる記事であるが、京

師に名ある醫師が、盜賊に山奥に連れこまれ

て、誰かの傷の治療をさせられた。だが目隠

る。今日の仕掛花火の工夫も玉屋の元祖に負ふところが多いと言はれてゐる。例の江戸流行の尻取文句にも「玉屋は花火の大元祖」と唄はれてゐる。だがこの花火の大元祖も、天保十四年五月十七日、將軍家日光御社參の日に、惜しいかな出火して焼失し、その咎で所拂ひとなり、爾後花火は鍵屋は獨占となつたが、今日でも、毎年の夏は花火には相變らず玉屋アの喝采は盛んで、誰も鍵屋アとは言はない。玉屋の先祖は定めし地下で満足してゐる事だらう。子供達の弄ぶ玩具の花火については、昨年の本誌七月號「川柳夏まざま」の中で述べたから割愛する。

さて最後に夏の草花の唯一の寵兒である朝顔を眺めて見やる。

朝 顔

朝顔は夏季の花の王座である。

しされてゐたので何處か分らず戻された。訴へ出たが板倉公も困つた。ところが醫師が言ふには、たゞ一つめづらしきと思つたのは佛法僧が鳴いたことだ。と言つたので、それなら松尾であらう、古歌によんであるといふので、探すと果して盜賊がゐたといふのである。躬恒集には、延喜八年八月十三日、左大臣家で入講があつた時の長歌がある。その反歌は其人も君は告しもせしものを

いかでか鳥のかねて知りけん

殿の返事、左衛門尉仲忠使にて

法をおもふ心しふかく入ぬれば

さとくも鳥の見えずありけん

「笈埃隨筆」には、靈元法皇が、修學寺に御幸あつて、佛法僧をきくために、山の茶亭で夜八つ時まで御滞在あつたことと御製とをのせてゐる。

聲をきき姿をいつの世にか見ん

佛法僧のありし梢に

佛法僧の歌としては又古歌に

うきことをきかぬみ山の鳥だにも

なく音はたつな三つの御法に

といふのがある。

佛法僧は、非常に訝えた、澄んだ聲であるから、一聲なくと、すーと腸まで澄み渡る。都座の中できいては左程でもないが、深山幽谷の中で、しんしんと更けわたる夜、溪川の音や霧の滴の、寒さを覚えしめる處や、夜明けの清浄な空氣の中にきくと、まことに全身が引き締まるのである。しかも、それが佛法僧と、啼くのであるから尙更である。深山に之を探勝したものが、深く胸をうたれて、さまざまな歌をのこしたのは故なきではない。

ラヂオで放送しても、尙ほ、高野などに、暮夜、杖を引くものが多いのは、それでもある。

だが、年々それが減少をするといふのは、嘆かほしい。何とか繁殖保存の適宜な法を見つけて保護をしたいものである。

佛法僧は、まだ充分研究もしつくされてゐないし、その飼ひ方も、はつきりしてゐないのである。

様々の格好や、色とり／＼に咲く變化に富んだ花である。

朝顔は朝寝のものにしかめづら

(天明)

朝顔は早朝の露のしつとりと降りた頃が見ものだ。朝顔日記の文句ではないが、露の干ぬ間がその生命であるから、勝手な夜更しで朝寝坊する連中などには、とてもその美しい見事な笑顔を眺める事は出来ない。川柳の諷刺は穿つたもの。

朝顔はお酒の飲める花でなし

(文化)

同じ花でも、櫻花のやうにバツト浮立つたところは無い。朝顔は静かに咲いて、静かに萎んで行く。このやさしい、美女のやうな朝顔は、荒くれ男の酒のお相手にはあまりに痛々しい。



授^{さづ}かりし智^ち慧^る

倉 田 百 三

みだぶつといふよりほかは津の國の

なにはのこともあしかりぬべし

法然上人の法歌と傳へられてゐるもののうちでは私はこの歌が一番心に沁みる。

この歌にしみ出る宗教的の心境は鍊りにねつて、澄み切つた念佛の生活の味はひだ。それが歌の調べともよく合つて、云ひ知れぬ趣きがあらはれてゐると思ふ。

結局はかうした生活法「世の渡りざま」となることが念佛の生活の一番深い境地であり、此處まで達せねばならぬのだと思はれる。これが本當の宗教的睿智ともいふものであり、私は此の智慧を法然から授かつたことをつく／＼と報謝したい氣がする。

法然上人を鑽仰する人たちは、よく法然の一生をかけたの深き心に會し、自分の生活の心組みが此の歌の心と同じになつてゐるかどうかを省みるべきであらう。さうなつて居ないならまだ到らぬのである。時としては法然を鑽仰しつつも日々の暮らし様は此の歌とはあまり似つかぬ、あらぬ方に外れてゐないとも限らないからである。私はかたく信ずる。此の歌とひとつ心になつて生きることに、これこそ上人の心に一番適ふ道であるといふことを。

一代の法をよく／＼學すとも、みだ佛といふよりほかの事あげをすべて揚棄せねばならぬ。必要があり便宜のために色々事あげすることはあつても事あげそのもの



はありのすさびに過ぎないのでなければならぬ。

「此の世の渡りさまは念佛の申されん方に過ぐべし」・同じ心を指導原理の形として法然はかうも云ひ表はしてゐる。

愚かには似るが、私は活ける信仰を求めつつ法然を慕つて、まだしかと掴み得ぬなげきを持つてゐるかも知れない人々のために少しく手引きして見やう。

宗教生活は一とすじ道になるためだ。無二無三とはこのことだ。生活の複雑と多岐と矛盾との中から一とすじの白道を見出してひたすらに歩いて行くためだ。

それには端的に言つて是非と得失とを放下して念佛の一念につかねばならぬ。かうした方が善いとか、悪いとかいふ考へ、かうした方が利であるか、損であるかといふ事で、普通には物事を決めてゐるのであるが、そうすることゝ止めて、かうした方が念佛が申されるといふやうに決めるのである。これが念佛三昧の生活である。是非と得失ではなく、念佛が申されるか否かを關心事とする。かういふのは非と失とを選べといふのではない。人情の自然としてわざ／＼悪と損とを好むものはない。さうした無理をして念佛が申されるものではない。素直に

自然にといふのが宗教のころだ。けれども善と利とを必ず求めやうとするところに念佛はない。それらは必ず得られるとは限らないものだからだ。善と悪との辨別のいか程六ヶ敷く、人間の心を熱鬧させるかは知る人は知つてゐる。利害の判断は猶更だ。この二つのはからひがあつては所詮人間の心は清涼にはならぬ。本當の平和、涅槃といふものは來ない。實にこれは人間の迷ひである。善と利との追求が人間を幸福にして呉れるであらうといふのが我々の最大の迷ひなのである。念佛の生活は此の迷ひを捨て、念佛申さるるの善、あの親鸞が「念佛にまさるの善なければなり」と云つたあの大善を求めるのだ。念佛申さるるの利、あの白隠が「瓦礫を以て黄金に換へるもの」と云つた大利を求めるのだ。ひたすらに念佛申さるる法悦につくのである。その時初めて相對、二枚のはからひの生活を脱して絶対一枚のひとすじ道に出ることが出来る。道が一とすじであることは何たるすがすがしさ、ひたむきさ、強さであらう。

念佛申さるるやうに萬事を決めて生きて、其處に自づからあらはれる善と利とを素直に受けければいいではないか。かくしても人間生活に避け得られぬ悪と害とをば素



直に忍受するのだ。悪と害との忍受なき「幸福なる生活」を求めやうとするのは存在せぬ寶を探し求めるものである。ただ南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と申して生きる。最も活々と、餘念なく、自然に旺盛に、充實して唱名されるやうにとそれのみ心がける。その外に善惡得失のことあげは「津の國のなには」の事も邪道なのである。此の指導原理を以て現實生活のすべてに處して行くとき、念佛の生活であり、法然上人の心に一致するものだ。かくいふのは、商人ならば商賣のことはせず念佛申せといふのではない。彼處に店を出さうか、出すまいか、それには色々な事情、詮じつめれば是非得失を考へずにやれる筈はない。端的に言へば、商賣である以上、儲かるか、儲からぬか、算盤を弾かずにやれる筈はない。それはやつていい。しかし究極に於て、儲かるから店を出すのでなく、出した方が念佛申されるから出すのでなくてはならぬ。念佛申されぬなら、儲かつても出さぬといふやうになつてゐねばならぬ。念佛申されるなら借金を棒引きせよ、又何處までも催促せよ、申されぬならどちらもすな。いづれにせよ、本人の心の内はいつも念佛の心境でなければならぬ。無理非道をして念佛申される

ものではない。しかし心にもない譲歩をして、闘うべき時もたたかはずに居て、心のうちに充實した輝きがあるものではない。念佛申さるる心の有様は活きた、輝いたぬれた情態である。念佛申さるるなら闘へ。又念佛申さるるならどんな犠牲でも忍べ。無理な闘ひをしても、又心にもない犠牲を拂つても念佛申さるるものではない。心が死んで居り、乾いて居り、傲つて居るからだ。人間の生活は一とすじ道にならなくては充實し、うるほひ又力が出るものではない。相對二枚の是非得失ではからふて生きるなら、心はあせり、事務的になり、ためらひつつすべてをせねばならぬ。人を救ふにも、又享樂するのにも打ち込んでひたすには出来ぬ。ためらひつつ享樂する、何たる悲しむべき事であらう。弓なりの空を、花さく樹を、美しい女を、時には一杯の酒をさへ全くの放れた心で享けたのしむのは生まれたものの權利である。そして此の權利は何處から來るのか。念佛から來る。そうするのが善いか、惡いか、得か損かはからひ以上の、絶對境から來るのである。許された生活、全く解放された生活とはこれを言ふのである。



解放されるには、善惡から釋き放たれただけでは駄目だ。利害から放たれねばならぬ。利を追ふために、邪魔物になる道徳を捨てて、惡事でも何でも利になればいいとはぬと云ふ心は念佛の心ではない。利でも、損でも念佛申されさへすればいいとならねばならぬ。必ず利が欲しいのでは涅槃はあり得ない。それは利に束縛されてゐるからである。

ひたすら念佛申さるるやうに生きて、それに伴ふ限りの善と利とを素直に享けるのが信仰の生活である。惡も害ももとより忍受するのだ。たとひ今夜生命を失ふとも忍受するのだ。全財産を失ふとも忍受するのだ。又大惡を犯すいきさつとならうとも忍受するのだ。そうした大覺悟なくして、信仰生活を求めやうとするならそれは出来ない相談である。ひたすら念佛に生きるとはさうした心ぐみの生活であつて、みだ佛といふより外は「津の國のなには」の事も捨ててしまはねば法然上人の心境にはなれぬのである。念佛は易行道と云つても、此の是非得失の捨離なくして一切の宗教生活はあり能はぬ。はからひの難しさ、思量分別の知解が要らぬから易行なのである。念佛よりも善と利とを愛しつつ念佛の生活が出来る

筈はない。そして是非得失を捨てることは實は大死一番である、世間普通の娑婆の心構へを捨てることである。此の否定と出世間の心理なくして生の肯定と世間の宗教を説くものは、宗教から逸脱したものだ、したがつて心の平和、涅槃といふものが、さうした態度から得られるわけがない。

是非と得失とを一度捨てさつて、ひたすらに念佛申さるるやうに生きる一すぢの道に立つこと、これが淨土門の生活法である。かくして此の世の「よし」「あし」と「損」「得」とは其處に伴ふてあらはれる自然法爾の如實を素直に受けるのである。

これが善き人法然上人から授けられたる智慧であり、これは阿波之介にも、上人にも、私にも通じてひとつなるみ佛のたまものに外ならぬのである。(一九三六、六、九)

近 刊

中村辨康著

四六判 六〇頁
五號總振假名付

一枚起請文講義

定價五錢

かつて本誌に連載し、好評を拍した、最も要を得最も易しい聖典の解説、施本用としても好適!

法然上人遺仰會



俗行者と一茶

椋鳥と人呼ばるる寒さかな

奥平祥一

けたなどといふ記事が散見するのであります。

中で最も面白いことに思はれるのは、一茶ともあらうものが、一時俗行者に迷はされて誠にやかに信心してをることでありま

す。
一茶といふ人は日頃から非常に信心深い人でありました。その日記を見ますと、所々に、今日はどここの寺に御開帳があるから参詣したとか、或ひは又どここの寺の千部會に参詣したとか、法談聴聞に出か

す。
一茶の七番日記（文化七年より同十五年

に至るまでの句稿手控）を見ますと、文化七年八月十三日の條に、

十三雨 豊島町左官一見

と記してあるのでありますが、そもくこの左官一見が曲者なのであります。

續いて同月廿八日の條に、

廿八晴 としま町（豊島町）なるうら家に住る壁の大工といふ者七日の頃より金毘羅の咒文唱へてあらゆる留み叶へるとかや町々の風聞たゞならず、けふ見にまかりけるに噂にたがはず一心不亂にして賽なすあり、素足参りする有、右左板壁にて僅三尺たらぬ通路を文七が元結こくやうに尾花が風に亂れあひつゝ行かひの男女たえざりき。おのおのすみやかに寶を招き忽ち病苦遁るゝを願ふなるべし、抑々かゝるわざはかしこき聖の鈴打ふりて神をいさめ佛をたのみてこそ炎天に雨ふり、枯木に花咲きおそろしきしやうげ（障礙）も

放るべく留め。されどしかじかの行ひは供へものれう(料)たやすからず、貧しき者は高山の雲、海底の玉と及ばぬとのみ見なして、思ひ止ぬる物からかりそめに手のとく賤しき人に秘法さづけ給ふは、げに／＼和光同塵の御心ならん。

月花や抑是は——

白露をいかに是なる俗行者

左官龜次郎改金井左門と云後九月七日比丘尼町へ遷座して吉田殿配下坂本安房とよぶ。

といふ記事があるのであります。十三日の條「豊島町左官一見」とあるのは、つまりこの俗行者の噂が専ら高いので、わざ／＼一見に出向いて行つて、更に廿八日に見物しに、出直して行つたといふのでありませう。

何しろ面白いことではありませんか。何時の時代にもかういふ俗行者、民間信仰は

その跡を絶たないものと見えます。しかしこの記事で見ますと、俳諧寺一茶坊その人も、だいいふ御熱心のやうに拜見されます。「抑かゝるわざは……」以下は一茶の感想なのでありますが、この中には、一茶の日頃の人生感がほんのちよつびりではあるが顔をのぞかせてをるのが面白いと思ふのであります。

例へば一茶にいはせると、世の中には聖僧高僧と呼ばれる高貴な人々は澤山にをられるが、それが高貴の方々であられる故にわれ／＼(一茶)貧乏人階級には容易に仰いで見ることさへ叶はない。恰も「高山の雲、海底の玉」のやうなものである。然るに、神の恵みといふか佛の慈悲といふか、今かゝる(豊島町の左官職如き)身分賤しきものに秘法を授けて、われ／＼貧しいものの願ひを叶へ、病を癒して下さるといふことはなんといふ有難いことであらうか。——さういふ感激が先づ一茶の心を捉へて

しまつたと見るべきではないであらうませうか。

白露をいかに是なる俗行者

とはその感激が凝つて一句の體をなしたと考ふべきです。一茶はその上五と中七とを「月花や抑是は」と改めて一層感激を強めてをるのであります。

その次に、丁度追記のやうな形で、俗行者左官龜次郎がその後もの／＼しくも金井左門と改名して、九月七日比丘尼町へ遷座し、吉田家の配下に屬してその名も更にことごとく坂本安房と呼んだといふことが記してあるのであります。

二

そも／＼この比丘尼町へ遷座したといふことが甚だ眉唾ものでありまして、當時比丘尼といへば一種の賣女のことなのであります。さういふ賣女稼業の者が集うてをつた町が比丘尼町、今でいふ魔窟のこと

●日●妓●女●を●雇●ひ●て●裸●参●百●度●と●云●々●し●て●
●人●を●迷●は●す●、●下●旬●社●人●縛●即●時●に●入●獄●
す、翌年十月十八日終に重追放に行
れて及社破却、未其惡氣残るにや、
今月別人ならん、宮下播磨と云者同町
に金毘羅を祭り群集不及前、又如前難
不可知計と世人云。

これによつて當局の忌諱に觸れた直接原因が判明するのでありますが、それにしても随分思ひ切つた宣傳策を講じたものであります。私が初めに、好んで比丘尼町あたりに引越して行く俗行者が甚だ臭いといったのは他ならぬこのことでもあります。それにしても、當局の彈壓にも拘らず雨後の筍の如くきのふは神田神保町に、今日は所も同じ豊島町目と鼻の間に、同じ金毘羅社が建つといふのはどうしたことでありませうか。

それは一つには、當時(文化・文政度)の社會状態を見なくてはならないのであり

ますが、とにかく當時の社會情勢が、かういふ類似宗教の續出を誘ひ出すのに誠に都合のものがあつたやうにも思はれるのであります。『未其惡氣残るにや』とは一茶の感想でありますが、その惡氣を私達にたゞの惡氣と考へたくないものであります。
遮莫、かゝる似非物に引掛りかけて、一時は宿願まで凝した一茶が滑稽に思はれ

て仕方がありません。彼とても十文や二十文の賽銭はしぼられたに相違ないのであります。

椋鳥と人に呼ばるゝ寒さかな
椋鳥を引かけようとする霞網は世間知る處に引廻らされてをることに私共は注意せなければならぬでせう。(了)

尊 德 の 生 活

四六判二二〇頁
價七拾錢

奥平祥一著 我々は尊德先生の傳記や思想を知るのみで満足してはならぬ。我々の日常生活と尊德先生の行跡を照し合せてこそ始めて尊德先生の偉大さが感得されるのだ。文章は平易、物語としてまたよし。

白 道 を 歩 む

四六判四〇〇頁
價一圓廿錢

山中峯太郎著 白道これは淨土に生れんことを願ふ純情の信念である。人間は宜しくこの白道を歩みたいものだ。本書は人生の白道を説いたもので受難の人生を歩むものゝ指南書であり修養の書である。

傳	奇
物	語

彌陀ぎっね

吉田初太郎

田村辰三畫

揺れる心

瀧口の本所ではたゞ一人でかへつて来た光遠を見ると、武者たちが、

「如何なされた。狐は？」と、口々にきいた。

「狐は搦めたが途中で解き放ちました。」

「何故、解き放ちました？」

「わざわざ本所へ手柄顔に搦め来る段もないと存じたのでな……」

「でも、折角の獲物を惜しいことに……」

武者どもは、これ以上いひかけなかつたがひそかに顔を見合せて意味有り氣に頷き合つ

た。

光遠は、もとより覺悟の上だつたので平然と自分の邸に引上げて行つた。へ一度は惻隱の心から命を助けてやつた狐なのだ。そのため

に朋輩たちから何んなに誤解され何んなに輕蔑されやうとも、すこしも意に介してはならぬ！ から決心の臍を固めた光遠であつたが朱雀院の築地の角で牛車に行合ひ、

「光遠、光遠。」

と呼びかけられ揚げた簾から突出された兵部卿忠國の顔を仰いだとき、思はず背すじの方まで冷たいものが走るのをかんじた。兵部卿

はごつごつ贅肉を左のこめかみや頭のあたり

に瘤立てた色黒い南瓜顔であつたが、そのときには殊に満面に朱を注ぎ、金盞眼を爛々と光らせてゐたので、平素より餘計に憤く氣に見えた。

「そちは、狐を、評判の惡戯狐を縛へに行きながら却つて誑られて、高陽川の瀬に突落されたとの。」

兵部卿は、光遠の烏帽子の上でがんがんと喚き立てた。

「狐に誑られたと仰せられる？」

「訝か！ 氣に問ひ返へすと、氣鍊い様を止めい。いまだに、そちは正氣でおらぬと見ゆるな。」

と、又も喚鳴るやうにいつた。

「いゝや、ずんと正氣でござる。卿はその噂をどこからきかせられました、きゝ棄てならぬ難言でござる。瀧口武者の面目にかけても容赦は出来ぬ……」

「はゝゝゝゝおぬしのいひさうなことだ。狐に誑られた腹癒せに人を恨むといふのか！」

狐に誑られた腹癒せに人を恨むといふのか！

日●日●妓●女●を●雇●ひ●て●裸●參●百●度●と●云●々●し●て●
 人●を●迷●は●す●、●下●旬●社●人●縛●即●時●に●入●獄●
 す●、●翌●年●十●月●十●八●日●終●に●重●追●放●に●行●
 れ●て●及●社●破●却●、●未●其●惡●氣●殘●る●に●や●、
 今●月●別●人●な●ら●ん●、●宮●下●播●磨●と●云●者●同●町●
 に●金●毘●羅●を●祭●り●群●集●不●及●前●、●又●如●前●難●
 不●可●知●計●と●世●人●云●。

これによつて當局の忌諱に觸れた直接原因が判明するのでありますが、それにしても随分思ひ切つた宣傳策を講じたものであります。私が初めに、好んで比丘尼町あたりに引越して行く俗行者が甚だ臭いといったのは他ならぬこのことであります。それにしても、當局の彈壓にも拘らず雨後の筍の如くきのふは神田神保町に、今日は所も同じ豊島町目と鼻の間に、同じ金毘羅社が建つといふのはどうしたことでありませうか。

ますが、とにかく當時の社會情勢が、かう
 いふ類似宗教の續出を誘ひ出すのに誠に好
 都合のものがあつたやうにも思はれるので
 あります。『未其惡氣殘にや』とは一茶の感
 想でありますが、その惡氣を私達にたゞの
 惡氣と考へたくないものであります。
 遮莫、かゝる似非物に引掛りかけて、
 一時は宿願まで凝した一茶が滑稽に思はれ

て仕方がありません。彼とても十文や二十文の賽銭はしぼられたに相違ないのであります。

棕鳥と人に呼ばるゝ寒さかな

棕鳥を引かけようとする霞網は世間知らぬに引廻らされてをることに私共は注意せなければならぬでせう。(了)

尊徳の生活

四六判二二〇頁
價七拾錢

奥平祥一著　我々は尊徳先生の傳記や思想を知るのみで満足してはならぬ。我々の日常生活と尊徳先生の行跡を照し合せてこそ始めて尊徳先生の偉大さが感得されるのだ。文章は平易、物語としてまたよし。

白道を歩む

四六判四〇〇頁
價一圓廿錢

山中峯太郎著 白道これは淨土に生れんことを願ふ純情の信念である。人間は宜しくこの白道を歩みたいものだ。本書は人生の白道を説いたもので受難の人生を歩むものゝ指南書であり修養の書である。

それは一つには、當時（文化・文政度）の社會狀態を見なくてはならないのであり

傳	奇
物	語

彌陀ぎっね

吉田初太郎

田村辰三畫

揺れる心

瀧口の本所ではたゞ一人でかへつて来た光遠を見ると、武者たちが、

「如何なされた。狐は？」と、口々にきいた。

「狐は搦めたが途中で解き放ちました。」

「何故、解き放ちました？」

「わざわざ本所へ手柄顔に搦め来る段もないと存じたのでな。」

「でも、折角の獲物を惜しいことに……」

武者どもは、これ以上いひかけなかつたがひそかに顔を見合せて意味有り氣に頷き合つた。

た。

光遠は、もとより覺悟の上だつたので平然と自分の邸に引上げて行つた。へ一度は惻隱の心から命を助けてやつた狐なのだ。そのため朋輩たちから何んなに誤解され何んなに輕蔑されやうとも、すこしも意に介してはならぬ！ から決心の膽を固めた光遠であつたが朱雀院の築地の角で牛車に行合ひ、

「光遠、光遠。」

と呼びかけられ揚げた簾から突出された兵部卿忠國の顔を仰いだとき、思はず背すじの方まで冷たいものが走るのをかんじた。兵部卿

はごつごつ贅肉を左のこめかみや頭のあたり
に瘤立てた色黒い南瓜顔であつたが、そのと
きには殊に満面に朱を注ぎ、金盞眼を爛々と
光らせてゐたので、平素より餘計に愼く氣に
見えた。

「そちは、狐を、評判の悪戯狐を縛へに行き
ながら却つて誑られて、高陽川の瀬に突落さ
れたとの。」

兵部卿は、光遠の烏帽子の上でがんがんと
喚き立てた。

「狐に誑られたと仰せられる？」

訝かゝ氣に問ひ返へすと、

「氣疎い様を止めい。いまだに、そちは正氣
でおらぬと見ゆるな。」

と、又も呶鳴るやうにいつた。

「いゝや、ずんと正氣でござる。卿はその噂
をどこからきかせられました、きゝ棄てなら
ぬ難言でござる。瀧口武者の面目にかけても
容赦は出来ぬ……」

「はゝゝゝゝおぬしのいひさうなことだ。
狐に誑られた腹盛せに人を恨むといふのか！」

ますます正氣の沙汰とも覺えぬ。禁裡の警固も心許ない。手段して瀧口の役を罷免させずばなるまい。こゝなうつけ者がッ！」

兵部卿は一喝すると、舍人に命じて牛車を軋らせた。

その牛車が朱雀大路を白く埃立て、大内裏の方へ薄らぐのを見送りながら握りしめた手をわなわなふるはせる光遠であつた。

はげしい喧噪が大路に起つた。

「止めるな！」まあ、待て。「離せ！」いや離さぬ。行光、そちは他人の喧嘩まで買ふて何うする氣だ。」

同じ瀧口武者、源行光が大刀の柄に手をかけて、青白い顔一杯に殺氣を漲らせ、牛車目がけて驅走せようとするのを朋輩の氏兼がしきりに引止めてゐるのであつた。

「あの南瓜野郎、牛車から引ずり下して謝らせてみせる。おぬし、あの雜言を光遠どの一人に浴せたと思ふか。瀧口武者全體に加へた侮辱でなくてなんだ……」

光遠は、元氣な若者が何を怒つてゐるかを

知ると黙つてすまされなかつた。「行光どの、まづ、お靜かに！」と、近寄つて宥めるのであつた。

夜三辰



行光は見返へすと、心を打たれたやうにその亂れた装束をつくらひ直していつた。

「光遠どのいろいろ御無念でござるませう。お察しいたしますぞ。」

「なんの、これも淺慮から出た自業自得と申すもので誰をも恨むものでもない」

「しかし、あなたのなさつたことが淺慮と申すものでせうか。故ない殺生は御佛の御教へにも悖る。放生されたのは、まことに御見上げ申したお振舞でござりまするよ」

「いはれますな。武者には慈な惻隱の心は不要なものでござつた。わしが一時のものゝ哀れに溺れて武者本來の面目を打忘れ、一たん擲めた悪狐を解き放つたことこそ一生の不覺でござつた。わしはもうこの上の屈辱にはたえられぬ、今宵のうちにも高陽川のあたりに行き、再び狐を擲めて來ようと存じまするよ。」

「眞實でござらうか？」

行光は驚いて眼を睜つた。

「眞實でござる。御佛の教へを説く聖でもない凡庸な武邊者のわしが、人を誑らかす悪狐を助けたとて何んの多足にならうか。今になつては生信心の附焼双こそ口惜しく思はれますよ。」

行光は光遠の面を痛ましく讀めた。(折角、狐を助けた功得も、心定まらぬ光遠には、却つて苛責の因となつたことこそ哀れである)と思ひながら。

野邊の選迫

「お出でなさいませ。今宵こそは不憫をおかけなさいますな。きつと揃めて本所に引具して、瀧口武者の面目をお立てなさいませー」

「いふまでもない。たとへ御佛の御怒りに觸れ死後は地獄の業火に焼れうとまゝ瀧口武者の一分を貰くまでぢや。」

立上つた光遠は、大刀を佩くと、蹶音も荒々しく部屋を出て行つた。

洛外の野面を行くと、行手から駒に乗つて近づく武者があつた。

「光遠どの……」それは源行光であつた。

「お、行光どのか。どちらから参られた。」

「北野の奥に、ちと用がござつてな。」

「北野の奥……では高陽川のほとりを」

「通りました」

「怪有な狐には、お逢ひなさらなんだか？」

「逢ひませなんだ。尤もわしが通つたのはまだ明るいうちでござつた。評判の河原には薄族の外に何んの影さへござりませなんだ。」

「それは屈強！」

「屈強と仰せあるは高陽川の狐を揃められやう御所存でござるか。折角の慈悲心を打ち毀ち、折角の菩提心を世俗の片々たる面目に代へるこそ、心憂い限りではござりませぬか。想ひ返へし京へ一緒に戻りなされませい。」

「いや、お止めくださるな。わしの心底は晝間お話し申した通りでござる。行光どの、本所へお出でのせつは、今宵こそ評判の高陽川の妖狐をきつとお目にかけやうとおつたへください。」

言ひ放つと、相手のいひかけるのも振棄て手綱さばきも荒々しく獲ものをあせつて夜闇に溶け行く光遠には、行光が鞍にくゝつた旅籠に高陽川の狐を手捕りしてかくしてゐるのに氣附く由もなかつた……。

揃めた妖狐

「なに、光遠どのが高陽川の狐を揃めた！」

瀧口の本所では宿直の武者たちが口々に叫ぶと、どやどやと燈を掲げて飛出した。

土御門で駒を下りた光遠が、こゝまで引具して來た紫苑色の柏婦が、本所の保々立にくゝられてあつた。

「高陽川の狐とはこれか。」

「なるほどこれでは誑らかさるゝも尤ものことだ。この藪更けた物腰は何うだ？ まことに稀有な美しさではないか。」

「しかし、被衣を脱がぬは心得ぬ。堪き取つて、まづ顔を吟味せん。」

口々に叫びながら、被衣の端に手をかけようとする、

「待て、聊爾すな。かりにも神通力得た靈狐であるぞ。時こそ來れば自ら本性にも戻るべきにみだりに手を觸れ、怒りを買ふな。」

いひながら、武者たちを突退けたのは源行光だつた。

「先づ退がれ！ 今宵はわしこそこの靈狐の
見張をするぞ。他のものは退れ。一人もこの
保々立に近寄るまいぞ。」

「行光、さらばおぬし
にまかせる。本性を顯
はすまでは必ず逃がす
まいぞ。」

「相手が稀代の靈狐の
こと故、必ず逃がさぬ
とは請合へぬ。しかし
逃げなばこれだ。」

行光は太刀の柄を打
と叩いた「安心せい。」

一刀兩斷にいたしてく
れるぞ！」

「では引上げる、みな
も本所へ引上げて、光

遠どのの功名話をきこう……」

武者たちは、行光一人を残してみんな屋内
へ引上げた。

光遠は疎まし氣にむつちりしてゐた。――



掌を返へすやうな人たちのざはめき様が氣
に食はなかつた。(これしきに何が功名だ。寧ろ、屈辱だ……)

光遠は爐明りに浮
くおのれの手に腫
を落してゐた。

脂氣のない手の
甲だつた。それは
年甲斐もなく一旦
逃がした狐を再び
搦めた意志の弱
さを恥ぢて萎え凋
んでゐるやうだつ
た。

「あの狐を搦めた
のは間違ひではな
かつたらうか？」

すると被衣著けた綾の相姿が、愛娘の桔梗
に似たのも不憚に思はれた。

「お手柄でござつた。よくぞ搦められた。流

石は光遠どの、手練に辭取らせぬを喜ばしく

思ひまするぞ。」

「さ、語らねよ。あの妖狐とはいかなところ
で行逢はれました。」

取圍んで問ひかける武者たちにも、光遠は
ますます興冷めるのみであつた。

月下の人たち

「出會へ、高陽川の狐が逃げたぞ！」

行光の消魂しい聲がし、つゞいて聲荒々
しく駆走せる氣配がした。その聲をきくと、
瀧口武者たちは打物取つて走り出した。藁更
けた娘の姿は消へて、行光の追ひ行く姿が土
御門のあたりに黒く浮んだ。

「それ行け、行光は土御門の外へ出ようとす
るぞ。」

「稀代の妖狐ぢや。力を協せて討ち取れや。」
ざわめき立つ聲々を疎ましく聞きながして
光遠は靜かに屋に出ると、門の保々立に近寄
つた。勿論、妖狐の姿はなかつたが、そこに
は紫菀色の綾の相が、闇の底に打棄てられて
あつた。何氣なく手にして打ちかへすと、一

葉の白紙がひらりと足元へ落ちた。拾ひ取つて、漏れ燈に透し見ると、光遠は顔色を青冷ましてふらふらと倒れかけた。

世に従へば心、外の塵にうばはれて、まどひやすく候。人に交はれば詞、よその聞きにしたがひて、さながら心にあらず。人にたはぶれ、ものに争ひ一度は恨み一度は喜ぶ。この事定れることなく分別みだりに起りて得失やむときこれなく候。折角、彌陀の本願をたのみまいらせ、高陽川の狐のいのちおたすけなされ候ひしにまたも分別みだされることこそ哀しく候。たゞいま狐を仆したりと思ひ最愛の娘を喪ひ侍るも宿業の故にこそ候はめ。よくよく御決定なされ今後こそ一向に彌陀の本願をこそ頼みまいらせるやう祈上げまいらせ候。

あらあらかしこ

桔 梗

父上さま

(桔梗に似たも同理こそあれ……)

よろめく足を踏みしめ、涙に潤む眼を土御

門の彼方に注ぐとき、

「斬つたは、美事……」

どつとあがる喚聲だつた。

「あな無慙！ 娘は……」

光遠は水干の内ふところに柏もろとも手紙をねちこむと駆走つた。

「おゝ、光遠どのか、見られい。稀代の狐ちや……」

瀧口武者が、月に濡れた薄簇を光遠に示した。そこにはふさふさした毛並の銀のやうに光る狐が、胴體斬られて横はつてゐた。

「まことに狐ぢや？」

光遠は、我が眼を疑ふやうに啞然としてゐた。

「大きな狐でございますよ。」

行光だつた。微笑を含んでやさしく見返へしてゐたのであつた。

「行光どの。そなた、眞實、これを……」

「安心なされませい。眞實の人か、狐か、見わけのつかぬ行光ではござりませぬよ。さ、光遠どの、もどりませぬか……」

まだ狐の死體を取かこんで口々にざわめき立つ瀧口武者たちから離れて、行光と土御門へとかへりかけた光遠は、

「行光どの、あれはおぬしが搦められた……」

と、靜かに若武者の手を握りしめてゐた。

「ようこそ、われら親娘を……」

「ではお娘、桔梗どのおこゝろが！」

「判り申した。身を殺してまで、わしの佛心を菩提心を深めようとしたけなげな娘の書置を、たつたいま保々立の下で祖とともに拾ひ申し、夢からさめたやうに覺えまするよ。して、娘は？」

「首尾よく！」行光は明るい聲でいつた。

「やがて、お邸へお着きのこととござりませう！」

立止つた老若の瀧口武者が懐める土御門の彼方、洛中の上には、眞如の月が皓々と照りかゞやいてゐた。(をはり)

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……



誠まことに生いまさる

—— 倒たふれてのち止やむ圓あん隨ずる上しやう人にん ——

窪 川 旭 丈

昭和二年の四月に、秋田縣黒瀬の善勝寺に五重相傳の勸誡師として招かれた事があるが、この時、勸誡師係として親切に私の世話をしてくれた人に、齋藤圓隨師と云ふ老僧があつた。

齋藤さんは秋田縣雄物町の正念寺の御住職であるが、誠そのもののやうな人で、御世辭一つ言はず、黙々として非常にゆきといた世話をして下さつた。小才が利くわけでもなく、口がうまいわけでもないが、終始變る事なく誠實を以て人に對するこの態度には、私もいたく感激して、毎日々々をその温い御

世話に甘えて右難く暮してゐた、處が或日のこと、謹言な口調で私に話しかけられた。

『私も長い間、廣大な佛恩を被つて來ましたが、この報恩の爲に近いうちに一世一代の五重相傳を勤修したいと思つてゐます。その節には是非とも御前様に來て頂きたい。』

と辭を低うして頼まれた。勿論私はこの有難い人格に感激してゐたから、早速承諾した。『淺學非才でよくゆきとゞきませぬが、薫障くり合はして努めさして頂きます』

『どうも有難うございます。今からその日を楽しみに待つてゐます』

それから四五年が夢のやうに過ぎ去つた。

齋藤さんの事も案じないではなかつたが、多忙にとりまぎれて御無沙汰してゐたが、突然次のやうな意味の手紙が來た。

—— 昭和九年の秋に愈々五重を開く事になり、いろ／＼と準備をすゝめてゐるが、貴下の御都合はどうか——

昭和九年の秋には北海道に布教に行くのでその歸りならば好都合と、日も指定して、直ちに承諾の返事を出した。

處が、その日もさし迫つて、私も北海道へ出發しようとする處へ、また手紙が來た。

——着々と準備もすゝめて、印刷等もスツカリ出来上り、何時でも開けるまでにこぎつけたが、急に總代が、今年は非常な冷害で、町民は不況に喘いでゐて、五重に入用の莫大な金は出せないから、今年開くのはやめてくれ、と反対を申込んで來た。私にとつては五重は佛への報恩であり、長い間の念願でもあり、且つ既に精神こめた準備は整つて、開會の日を楽しみにしてゐたのだから、極力賛同してくれるやうに懇願した。すると、總代は「それでは勝手になさるがいゝ、私共はその職でないから總代を辭めさしてもらひます」と辭職を申出た。かうなつてはどうする事も出来ない。私の不徳の致す所と佛前に心からの懺悔を捧げて、後悔の涙にむせんである。貴下にも御迷惑をかけて誠に申譯もないが、事情を察して御出發を見合して下さい。——

と云つた意味が綿々として書き列ねてあつた。一生一代の聖業として待ちに待つた五重

而も準備はスツカリ出来上つて歡喜の念抑へやらずにゐた處へ、思はない反對に會つた齋藤さんの苦衷は察するに餘りある。誠實溫和な人格を親しく知つてゐる私であるから、手



(窪川旭丈師)

紙の中にうちしほれた齋藤さんの青ざめた顔さへ見える心地がして、そゞろに同情の涙にくれた。

私はもと／＼五重が一宗の安心を指南する

一大教化運動であるにも拘らず、やゝもすると寺院の經濟運動とせられたり、或は多額な經費をかけて、檀家に迷惑をかけるやうな傾向のあるのを遺憾としてゐるが、この時も、

——經濟に重きをおかず、純粹の教化運動として勵行するやうになさい。私への法禮等も勿論心配しないでいゝから、この點をよく總代の人に諒解させて、今迄の準備を無駄にせずには是非ともお開きなさい。——

と懇々と教化中心の五重として開くやうにすゝめて、北海道に出發した。すると、また折返し北海道に手紙が來て、

——出來るばけの努力はしてみたが、總代はどうしても承知しない。阿彌陀様にも貴下にも誠に申譯もないが、私の不行届と、切に御許し下さい——

と泣かんばかりの文面であつた。齋藤さんの誠意ある奔走も遂に萬事休してしまつた。而るにその年の正念寺の十夜の中日に、と

んだ事件が起つた。法要漸く爛の時に、導師の齋藤さんが腦溢血で卒倒したのだ。幸ひにも病状は輕くて、間もなく落着く事が出来たが、この事件は檀信徒に非常な衝動を與へた。

『約束にそむいたので佛罰が當つたのだ』と當の齋藤さんは心からうちしほれてゐる。

『五重中止の心痛が御住職を倒したのだ』

の聲がだん／＼檀徒の中から聞えてさへ來た。遂には

『若しもこのまゝでなくなられでもしたら、それこそ檀徒は面目もない』

と同情者迄が出て來た。そして、この人達が悲運な住職の心中を察して、とう／＼頑固な總代を説き伏せてしまつた。かうして翌年の昭和十年十月には住職・總代・檀徒一致して、華々しく待望の五重相傳を開く事が出来た。齋藤さんは身體こそまだ不自由ではあつたが、多年の念願が漸く酬ひられた喜で、

始終元氣で、無事に務め上げられた。その安心からか、日増しに身體もよくなつて、今日では昔と變らない程の元氣をとり戻された。今年の三月の善勝寺の第二回の五重にも隨喜せられて、相變らず親切に世話して頂いた。何でも無い話のやうであるが、誠實の人、齋藤さんの隱徳を最もよく現はしてゐる美談である。何時も黙々として誠で人に對する師の圓滿な人格の力を遺憾なく現はしてゐる。また齋藤さんの一面を語るものに、こんな話がある。

正念寺は昔日は龜田藩の寺で、非常に榮えたものであるが、明治維新後はスツカリ衰へて、今日では日々の生活にさへ追はれると云ふ貧乏寺である。従つて弟子の養成などと云ふ事は願つても出来ないのであるが、齋藤さんは

『貧乏に負けて弟子も作れないとあつては佛様に相すまない』

と、圓乗と云ふ弟子の育英に懸命の努力をして、この苦しい中からとう／＼大正大學迄卒業させられた。

大俳壇

木村 架空撰

達 雄

杜 水

五 千 石

幸 治 郎

福 三 郎

秀 子

耕 人

機

杜 水

春雨にぬれつゝ山のいこひ哉
 〇 ゆく春や皆素足なる村童
 〇 暖かや水の底まで日のとほる
 〇 春うらゝ、鶉の鳴く眞晝中
 〇 をしげなく落花續くや雨の川
 〇 手を洗ふ渚の水や春の月
 〇 貧しくも天が下咲く櫻かな
 〇 八重櫻一重となりて散る日哉
 〇 苗代や蘆や寺の前うしろ

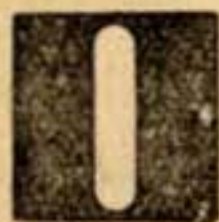
勿論、この間の學資に就ては非常に心を苦しませ、特に、大正大學在學中は、毎日／＼機家に月經を回向して廻り、五錢、十錢、二十錢の零細な御經料を集めては、學資として東京に送られた。不自由さしてはすまないといふ尊い弟子思ひの人格が輝いてゐるではないか。誠で人に對する齋藤氏の風貌が躍々として輝いてゐる。

而も、こんなに迄苦勞して育てた弟子は、

今日では事情あつて師の許を離れ、遠く四國にゐるが、決してそれをうらまうともしないし、自分の淋しさをかこちもしない。何と云ふ有難い人格であらう。心に燃ゆる護法の信念を、身を以て示し、誠實そのもので生き行く齋藤師こそ、現在の宗教界に、いや／＼現代に求めらるべき眞の人物である。(をはり)

たし歩進も最 藥腦頭正純

頭痛に



頭痛に一番
効果に無害

頭痛で頭がワレレ程カンカンしたり、眉間の邊りが針で刺される様にチクリチクリと痛んだり、又頭痛と迄行かなくとも、何となく頭が重くてボンヤリしたり、クシヤクシヤしたりイライラしたり、或は過度の讀書、執務、裁縫、置夜映画、觀劇後等で心神の疲勞を感じた時等、スグに「ノーシン」を服用せられ、今「ノーシン」をのんだ事さへも、思ひ出さない程キレイに痛みは消え失せて、それこそ暗闇から抜け出て来た様に頭はハツキリと明快になり、思ふ存分、愉快に、事務勉強、讀書、家事、裁縫等を續けることが出来る。論より證據スグ試みられよ。藥價は三十錢、五十錢、一圓。全國の藥店やデパート藥品部にて販賣す。

町京區東市墨古名
社會名合部太長川荒 元造製

○ 春雨は糸より細し鬼がはら

○

葉櫻に山の静けさ戻りけり

○

牛小屋の家根一面や落ち椿

○

ともかくも我世の春ぞ物静

○

霜の中うつら／＼と春の旅

○

灌佛や衆生再度に丸裸

○

評 丸裸は一所懸命を意味す、又持合せの物なきことを意味す、これを思へば今の教育者の蘊蓄の多きことよ。

○

○ 彼の人に牡丹を切りて跡さびし

○

評 彼の人への心中だて、さこそと同情せらるれど、牡丹を切つて力ぬけたる鹽梅は、さすが花中の王なればなるべし。

○

○ 蕘摘む吾子や入目をさし招く

○

評 平相國にはイヤ／＼をしてかぶりを振られた天道様も、いたいたけな紅葉の手に招かれては困りなさう。

公孫

如庵

諦眞

義一

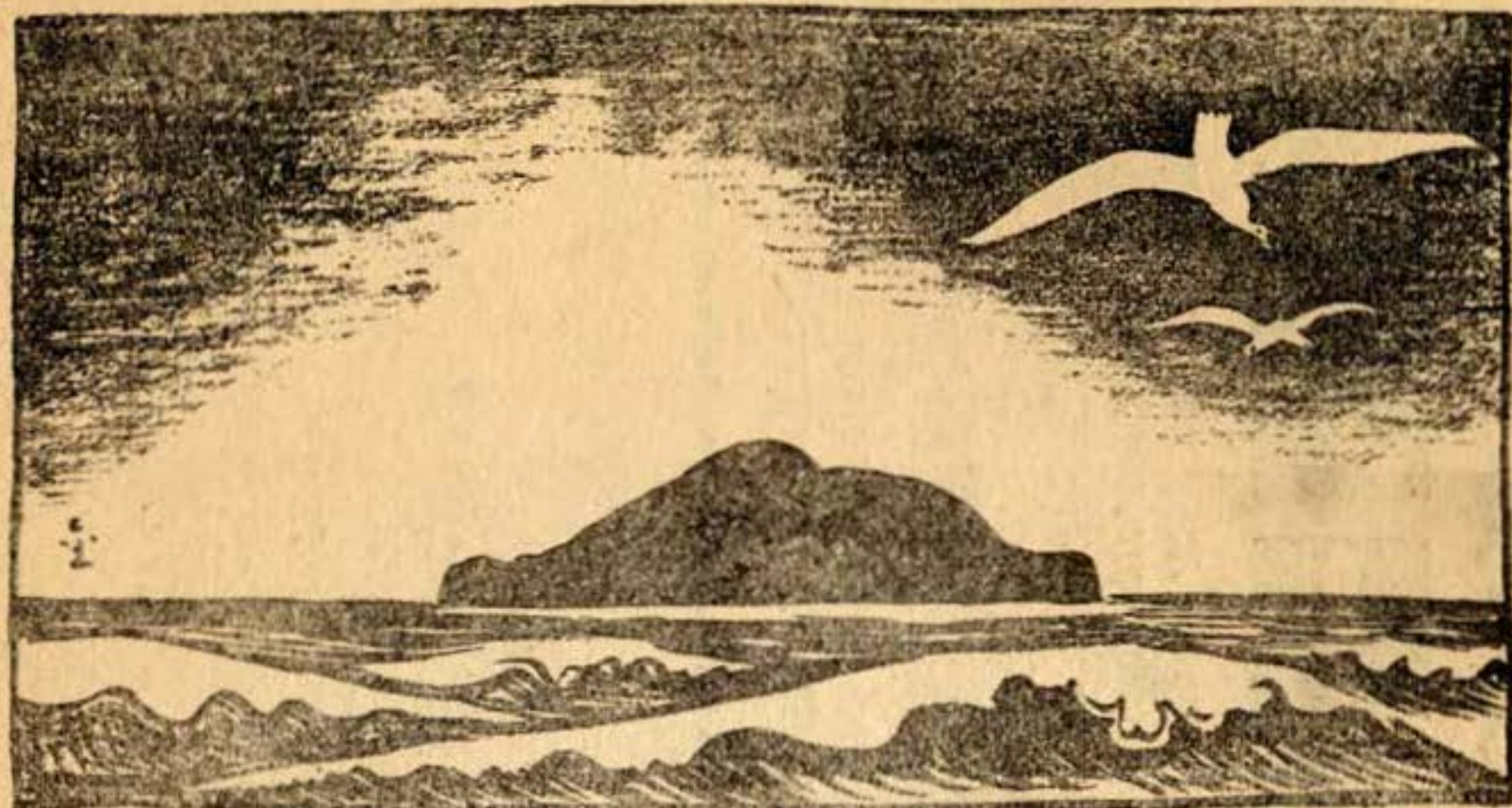
公孫

映水

香雪

杉春

ど・う・よ・じ・の・も・ど・こ



話 童

海の鬼が法然

上人の舟に出た話

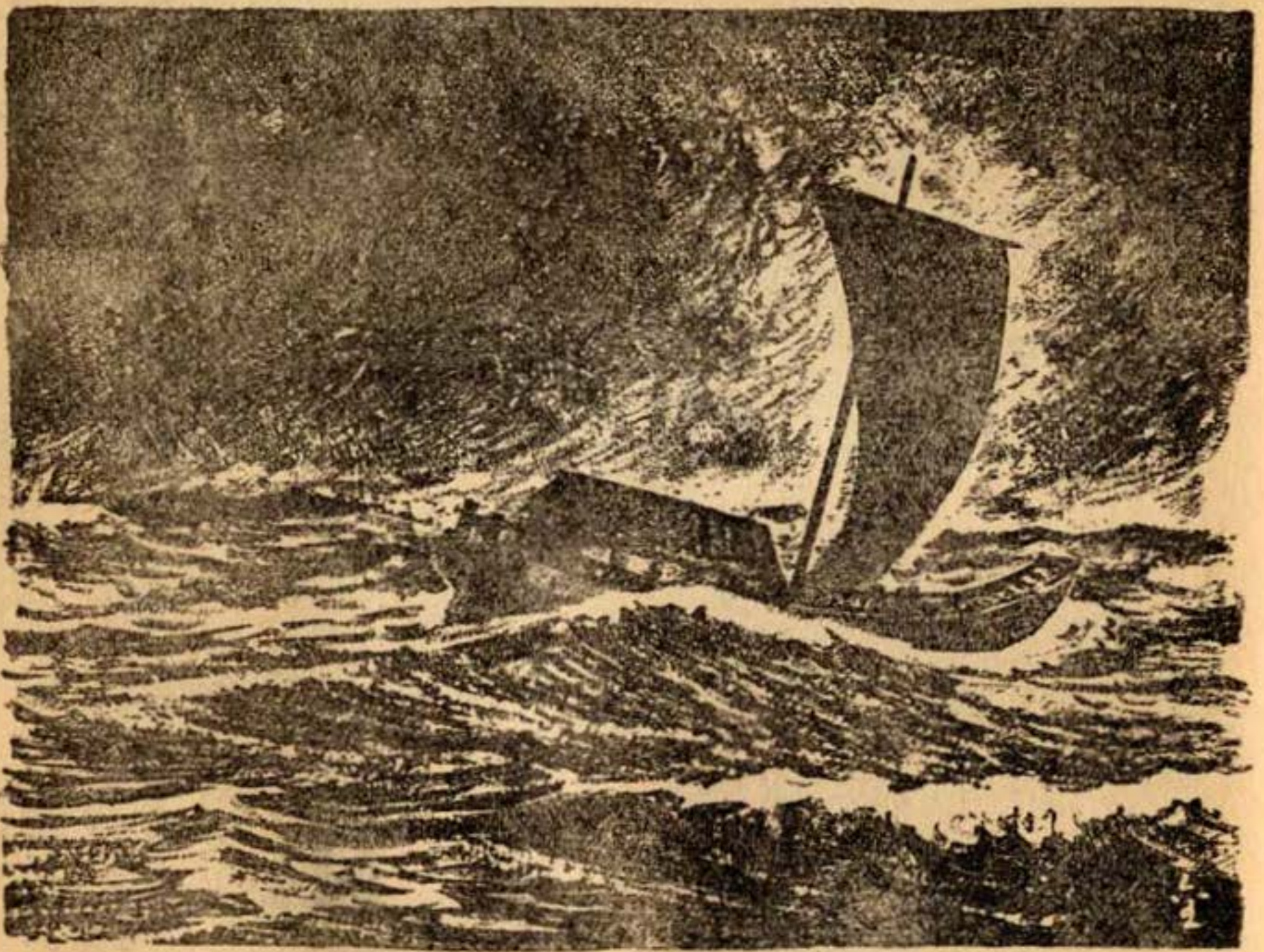
佐藤 春夫作

鈴木 金平畫

これは南無阿彌陀佛と聲を上げてつゞけさまに十聲呼び奉りさへすれば、阿彌陀様のお慈悲によつてどんな人でも極樂へ行くことが出来るものだといふことを人々に教へた法然上人が、そのお教へが世に廣まつたのと外の宗旨の人々から嫉まれた頃、折悪しくお弟子のうちに悪い噂の立つた人があつて弟子の罪は師匠の不取締だと朝廷からお咎めを蒙つて、京都から四國の方へ島流しの御處分をお受けになつて、その途中攝津國福原の經ヶ島の邊であつた出來事であると昔の本に書いてあります。福原といふのは今の神戸の近所でその經ヶ島は平清

盛がお經文を刻んだ石を用ゐて築いた島だと申す事です。からそのお經で佛様のお恵みを受けた海底にゐる鬼神と、この上なく有難い法然上人とを組み合せて語り傳へたお話と思ひます。何れつくり話ではありませうが、それでも法然上人といふお方のお考へや徳の高いお方でゐらせられた事はよく判ると思ひますので少年諸君の爲にそのあらましを語り直してお聞かせします。

法然上人のお船が攝津の經ヶ島のあたりへさしかかったころある晩のこと、今まで静かであつた海がどうしたものか急に荒れ出し浪が船べりへひどく打つつかつて船は左右に揺れはじめた時、どこから



出て來たものか身の丈五丈ばかりの鬼神の色の飽くまで赤い奴がひとり船の胴の間へ忍び込んだかと思ふと、つづいてひとり今度は水の泡のやうに色の白いのが現れて上人の右と左とに並んで突立つたので武士から上人のお弟子入りをして今度の旅にも上人の護衛を自分で願ひ出てついてゐた二人の若い坊さんが、お師匠さまの上人のお身に間違ひでもあつてはならいと刀の櫛に手かけて斬り殺してしまはうと身構へはしました。今までは少しも氣がつかぬやうに一心にお念佛ばかり申してゐる上人さまはこの時はじめて氣がついたものか、

「これこれ騒々しいではない

か、少しぐらゐ海が荒れるからと申してさううろたへる事もないぞ」

と靜かに仰せられたので二人のお弟子も靜かにお側に座つて鬼神どもは何をするかと番をしてゐますと、赤い方のは上人の左のお膝の上へ自分の顎をのせて上人のお顔をつくづく見上げてゐるし、白い方のは上人の右のお膝へ顎をのせてこれも上人のお顔をちつと見上げてゐるだけで別段悪い事をするやうな様子も見えませんでした。上人様はいふと、一向驚いた御様子もなく平氣で、お眠くなつたやうにお眼をおつぶりなされたまましばらくに樂しさうにお念佛を申して居られるだけでした。驚いたのはかへつてふたりの鬼神の方でした。暫くはぼんやりとして黙つてゐましたが、やがて赤い方が、

「上人さま、わたくしどものやうな怖ろしいものを御覽になつた事がございませうか——一向びつくりもなさなぬ御様子ですね」

と申したので、上人ははじめてちよつと眼をおあけなされて

「さうさ、わしはお前たちよりもつとおそろしいものを自分の身のなかへ持つてゐるものだからね」

と仰せられた。鬼神はもう一度びつくりした。

「それはまた何故でございます。」

「惡業の煩惱といふ名のくせものだが、世界がまだはじまらない程の大昔から、そんなものがゐて何度でも何度でも生き返り死に返りしながらもまだついぞ佛になることも出来ないといふのは、この惡業の煩惱といふくせものがわしの身にひそんでゐるがためである。お前たちがそんなぶざまなものに生れて來てゐるのもやはりわしのものと同じ惡業の煩惱といふくせ者の仕わざである。それ故わしはお前達を見ても怖ろしいとも疎ましいとも思はないのである。昔の昔の大昔からさまたまなものに生れ變り死に變りして來たわしの惡業の煩惱であつて見ると、きつとわしもいつか知らお前達のやうな形のものに生れ出た事もあつたのであつたらうよ。その折にはひよつとしたらお前達を親とも兄弟とも思ひ、お前達と同類のひとりであるかも知れないのである。このむかしのむかしの自分を考へると、お前たちが怖ろしいの憎らしいのといふ考へは少しもない。その昔の昔を思ふとなつかしいぐらゐなものである。」

と言葉もやさしく仰せられてすぐのん氣さうに靜かに念佛ばかり申して居られます。



二人の鬼神は何に感じたのか急に上人の前に座り直してふたりで右左から上人に手について申し上げるのであつた——
 「こんな人の怖れさげすむ形をもお厭ひなさらぬありがたいお言葉に甘えまして今夜ここに姿を現はしましたわけを申し上げてお願ひ申し上げますが、わたくしどもの壽命は昔から高が九百歳といふきめださうでございますのに、わたくしどもの兩親とももう六百年も生きてあとの壽命はほんの三百年しかございませぬ。さうしてわたくしどもの年は今やつと二百でございます。さういたしますと、わたくしどもは五百かそこで兩親を失はなければなりません。それでさへ、もういかけんに心細うございますのに、父親は近頃體が弱くなつてしまひまして、とても定命も覺束ないかと存ぜられます。どうぞ父を出来るだけ長生きさせたいでございます。せめて定命だけは保たせたいでございます。今天下で智慧第一と噂の高い上人にわたくしどものお願ひは、わたくしどもの父を長生きさせる法をお教へ下さりますまいか。また重ねては、わたくしどもをこんな醜い姿から逃れさせていただく術を御存じではございますまいか」

と、まごころを現はして交る交るに申し述べるのでした。上人はにこやかにうなづきながら、

「うむ。さればさ、折角の相談ではあるが、わしは智慧第一どころか、今も話したとほりお前達と一向に變りのない者である。それに生死は到底のがれられない約束である。生者必滅と申してゐるとほりで、世間の人達でもお前達の姿よりは死の鬼や、地獄の鬼の方をもつと怖ろしがつてゐる様子である。して見るとお前たちはさう怖ろしい姿でもないわけであらう。もつとも、もつと早く佛の教へを知つてゐたら同じ仲間でもわしぐらゐになら誰でもなれさうなものをお前のやうな形で世に出て來たのはまことに氣の毒である。まあせいぜいお念佛でも申して、この世は致し方ないとしても、次に生れ變る時には金色の立派な佛様になつて、西方の極樂淨土でお前達もお前達の兩親もみな今度はもう死なないですむこの上なく楽しい立派な國で皆な睦み合ふ世界へ行く心掛けが第一である。わしもそれが望みで、かうしてお念佛を申し上げてゐる。わたしもその國へ行きたいからである。」

「上人さまのお出でになりたいと仰言るそんな結構なところへ、わたくしどもがどうして参られませうか。」

「いや更にわけもない事である。わしが今申してゐるやうにお念佛を聲を上げてつづけさまに十聲申せば阿彌陀さまは阿彌陀さまのお國へ引取つて下さるとお約束をして置いて下さ

れてあるのをうたがはないで、お念佛を一心に申すまでの事である。外にむづかしい理窟は何もないぞ。」

こんなお話をしてゐるうちに夜が明けたのか、あたりが白くなつて來たので、鬼神はあわてうろたへて海のなかへ歸らうと上人に挨拶を申し上げて

「ありがたうございます。それではまたお目にかかれませうか。」

「いつでも遊びにおいで、又お念佛のお話をしてあげるよ。」

上人は鬼神を遊び仲間に入れて仲のいい友達にしてやつたやうなことを申して居られます。

はげしい水音を立てて鬼神は舟の兩側から一度に海のなかへ飛び込んでしまひました。今まで荒れ放題一荒れてゐた海は、急に靜かになつて魃の波音も囁くやうにひっそり納まつてしまひました。

いつの間にか寢入つてしまつてゐたお弟子は、はげしい水音に目をさまして、互に

「お早う」

と挨拶をしてから昨晚の怖ろしい話を語り合ひはじめました。彼等は海賊共が上人のお船を襲うたのを上人が少しも咎めなかつたと言ひ合つてゐるのでした。それをお聞きになさ

れた上人は

「お身たちは海が荒れたので怖ろしい夢を見たのぢやのう。」
「わしが見たのは親孝行な兄弟の夢であつた。少しも怖ろしいところのない不思議ない夢であつた」

と上人はさう仰言つてにこやかに笑つて居られたのでした。

お弟子の夢と上人の夢と皆さんはどちらが本當の事だと思ひになりますか。わたくしは知つてゐますが、實は兩方とも本當の事であつたのでどちらも夢ではありませんでした。病身な親を養ふために他に方法を知らないので海賊になつてゐた兄弟が上人のお船と知らないで襲うたのを、上人は溫い心でなぐさめ諭して歸されたのです。老とつて働くことも出来なくなつた貧乏人の孝行な息子に盜賊をさせなければならぬのは昔し昔の大昔からの人間全體の責任である。人間は皆同じやうにかはいさうな間違ひだらけなものであるから、この海賊と同じ罪を上人御自身も感じてゐると仰せられてゐます。惡業の煩惱のくせ者のわざであるといふお言葉の出るところなどがさういふ事らしいと思はれます。どうしてそんな風に仰言つたものかそれは上人ほどの立派な方になつてはじめておわかりになるのでせう。

上人法然の信仰の案内書

藤井實應編

菊版半裁版一四四頁
總クローヌ装カパー付

法然上人法語抄 定價 三十四錢
送料共

信仰の珠玉！ 浩瀚なる上人遺文中より現代生活に最も適切なるものを選んだ句々金玉の聖句。

中村辨康著

四六版一三〇頁
九ボ總ふり假名

法然上人の信仰生活 定價 三十四錢
送料共

法然上人の辿り給ひし信仰の道こそわれらが求道の最大のしるべである。現代日本人の常識としても知らねばならぬものである。

中村辨康著

四六版八〇頁
九ボ總ふり假名

信 仰 讀 本 定價 二十二錢
送料共

邪教に對しては正しい信仰の把握を以つて對抗せよ！ 本書こそ簡にして要を得たる求道人のための案内書である。



竹たけの編あみ戸ど

妓ぎ王わうと佛はつ

畠

四郎

さて、「日本秋津島は纒に六十六箇國、平家知行の國三十餘箇國、既に半國に越えたり。其外庄園田畠幾らと云ふ數を知らず。綺羅充滿して、堂上花の如し。軒騎群集して、門前市をなす。楊州の金、荊州の珠、吳郡の綾、蜀江の錦、七珍萬寶一つと

して關けたる事なし」の平家全盛の世であつた。都は申すに及ばず、六波羅様と云へば一天四海の者皆これを學び、平家にあらぬものはすべて人非人だといふ傍若無人の豪奢振りが、世の中全體を覆うてゐた頃のことであつた。

京の都に太政の入道清盛の寵愛を一身に集めてゐた白拍子の上手、妓王といふ遊女があつた。——そもそも平家一門の榮華を、かうまで導いた當の清盛には、熊野權現の

御加護が附き添うてゐると云はれた。その清盛がやがて太政大臣の一の人の位を極め、子孫の官途も龍の雲上にのぼるより速かであるよ、と世評の渦を卷いた頃、病にかされた。そこで命を承らへるために、五十を越した清盛は出家入道し、淨海といふ法名までも自らにつけたのである。そのせゐか、宿病も忽ち癒えてますます盛んな天命を完うしたのであつた。したがつて、出家の後も清盛の勢に乗つた榮耀にはか

はりない、いや入道相國の呼名こそ絢爛たる奢りの主にふさはしい……

その妓王には妓女といふ妹と、とちと呼ぶ母親があつた。母親三人何れも白拍子であつたが、姉嬢が入道殿の寵愛をうけると、あとの二人は數寄を盡した住居をあてがはれ、月々百石百貫の仕送りを受けて、楽しい暮しを送る身分になつた。

京中の白拍子達は、妓王の榮達を目のあたりに見せられて、羨望と嫉妬の炎に身を焼かぬ者のないくらゐであつた。同じ遊女となるからは、誰もみなあのやうな生活をしてみたい、——その妓王にあぶかりたい意味で、自らの名を妓一、妓二、妓福、妓徳などとかへる女達が出来た。が、また一方、改名したとて笑止である、生れながらの運命をどうしようとするのだと云つて、そつぽを向く者もをつたが——

妓王が入道相國に抱へられて三年経つた。白拍子の上手がひとり、はるばる加賀

の國から都にのぼつて來た。名を佛といつて、年は十六であつた。すると忽ち彼女の舞の水も洩らさぬ巧みさが、その天性の美貌と相俟つて、京の老若男女の魂を奪つて行つた。「まだこのやうな白拍子を命輪際夢にも見ぬ。」といふのが、巷の人々の口からほとばしり出る言葉だつた。その佛が或時、入道相國の妓王に對する噂を耳にして、自分も同じ遊女の冥利に入道殿へ召されぬことが口惜しいと思ひ、ひとり西八條の後殿に推参したのである。

ところが、その取次をうけた清盛は、「人のお召しによつてまゐる遊女が、誰の許しもなくて押しかけるとは以ての外。」と立腹して、相手にしない。仕方なく立戻らうとする佛のあはれな姿を「暫く」と遮ぎつたのは妓王であつた。

「遊女の推参は常の習ひ、ましてまだ年齢もゆかぬ者らしい。すげなくお断りなさらずに、お會ひしてあげてよろこばせたら。」

かう清盛をなだめながら、佛を御前に連れまゐつた。妓王の取りなしで怒りを鎮めた清盛は、

「見参するうへからは今様一つうたへ。」と佛に命じた。畏まつて靜かにうたひはじめる佛——君を始めて見る時は、千代も経ぬべし姫小松、……その玉をころがすやうな美しい聲の音いろに、控への面々の心が騒ぎ立つた。が、それにもまして吸ひつけられるやうな佛の唇許に熱い視線を離さないのは主清盛だつた。

「舞を所望ぢや、舞を。」
唄ひ終つて會釋する佛に、我に返つた清盛はすぐさま言葉を發した。

入道相國が妓王を迫ひやつて、新な佛に連れ込んでゐると、世上の噂さがひろがつたのは、それから間もないことである。——見参の日、めでたく舞ひ納めて別れを告げようとする佛に、思ひがけない寵愛の手が

差しのべられたとき、女ながらに知る妓王の心を汲んで、早速振拂はうとしたのだつたが、罐門のまへには猛き男でさへ頭を横に出来ない習ひ。——心で妓王に詫びながら、佛は愉しいはずの日々を、そこはかたなく消してゐた。

さて、宿に下つた妓王は、好事家揃ひの都の大盡どもの招きにも應ぜず、過去の華やかさを思つて涙のうちに妹とともに母親に仕へてゐた。いまは西八條からの仕送りとなつてない。妓女の稼ぎで一家は細ぼそと朝夕の煙を立てるのであつた。「萌出づるも枯るゝも同じ野邊の草何れか秋にあはで果つべき」身の追放をまへにして、僅かにさう諦悟し得たと思つたのであつたが、日が経つに連れて、その歌に同じきれない自己の姿を嘆かずにはゐられなくなる妓王であつた。

さうして一年経つた。西八條からの使ひが来て、入道相國の命により佛御前を慰め

んため至急参上せよ、との妓王へのお召しであつた。妓王は返事もせず使者を歸した。重ねて使者が立つた。妓王はなほも頭固にきき入れなかつたが、命に叛いてこれ以上の浮目を見せるなと云ふ母の言に、遂に我を折つて、妹の妓女を伴ひながら西八條殿を訪れた。懐しい屋敷内、それも妓王にとつていまは恨みの眼差しで見ることがないが。と、いつもの見参の間へは案内されず、遙か下手の一間に通された。妓王はさすがに、せきあげる涙をどうせうもないのであつた。

妓王は泣いて今様を唄つた。すると、それまで清盛の傍らに侍して俯向いたきりの佛が、これも涙に滲んだ眼をあげて、
「佛も昔は凡夫也。我等も終には佛なり。何れも佛性具せる身を、隔つるのみこそ悲しけれ。」

と、妓王へ返しうたを唄つたのであつた。森と静まりかへつた一座のこゝかしこに、

かすかなすゝり泣きの聲が湧いた。
「けふは舞もと思つたが、もうよい。これから召さずとも時々まるつて佛を慰めよ。」突然、からからと打笑つて口をきつた清盛のまへに、妓王はしづかに頭をさげると、そのまますうと座を立つて行つた。

妓王は死をはかつた。永い世の闇に生きるすべを見失つた。が、それもまた母親の手に押留められたのである。

かうして都に生きられぬ生を擔つた遊女は、嵯峨の奥の山里に柴の庵を結んで佛に仕へる身となつた。母も妹も、やがて姉娘と同じやうに髪をおろし、一家揃うて一向専修に念佛を唱ふるくらしをもつた。——

それがひと秋の暮方親子三人諸共に念佛申してゐるところに、竹の編戸をほとほと叩く者があつた。もしや云ふ甲斐ない我等の念佛を妨げようため、魔縁の訪れ来た

のではないかと、三人が戒め合つて戸をあけると、思ひもよらぬ佛がひとり、しよんぼり旅姿で立つてゐたのだつた。妓王がまつ先きに驚きの聲をあげた。

「まことかな、佛御前の見えられるとは。」その言葉のまへに、佛はわつと泣き伏して、喘ぎあへぎ語りだした。

「何と云うても女の身、申しやうない苦しい日々でござりました。わごぜに合す顔とてないものながら、一日も早うこゝにまつてお仲間入させて戴きたい念願でござりました。入道殿はわらはの心も汲みまをさず、なかなか暇をくれぬ御所存ゆゑ、今朝ひとりでそつと御殿を抜けまゐりました。娑婆の榮花は夢の夢、一旦の榮花に誇つて後世を知らぬ恐れと悲しみが、つくづく身に沁みて來たのでござります。もはや都には戻らぬ身ゆゑ、何卒わらはをお置き下されませ……」

さうして、きぬかづきをぬぎ捨てると、

佛は尼になつてゐた。

妓王は涙を押へながら、

「わごぜのそれほどまでの思ひも存ぜず、身の苦しさを味ふにつけ、ともすればわごぜ一人をお恨み申したことが恥づかしうてなりませぬ。わらはが尼になりましたのは、云はば世を恨み身を嘆いたからでござります。それに引かへ、わごぜは恨みもなく嘆きもない身のうへ、そのみか年もわらはより下でありますのに、穢土を厭ひ、淨土を願ふお心がけ、誠の大道心と思はれて勿體ない氣がいたします。」

さう答へて、固く固く佛の手を握り締めるのであつた……

さて、三人が四人になつて、朝夕佛前に向ひ花香を供へて、他念なく往生を願うたことは申すまでもない。後白河法皇の長講堂の過去帳には、妓王、妓女、佛、とち、の尊靈がひとつところに記入されてある。

平等の大慈悲

明治の傑僧行誡上人が、或時淺草の觀音の參詣を思ひ立ち、侍者を連れて仁王門のところまで差掛ると、いきなり後ろからヤツと云ふ掛聲諸共、竹刀でいやといふほど頭を敲かれた。振返ると、「面白い、面白い」と大聲で笑ひ出した男、それは狂人であつた。上人は黙つてそのまゝ行すぎ、參詣をすましてそのへんまで戻つて來ると黒山のやうな人集で騒いでゐる。不審に思つて侍者に見させると、人殺しがあつたと云ふ。先程の狂人が、血氣の若者に戯れて反對に命を落したと云ふのだ。上人は死んだ狂人の自分への無禮も忘れ、頭の痛さをも忘れて、懇ろに回向をし、寺に歸つてからは更に、「逆縁觀竹居士」といふ法名を與へて後世を弔つた。そればかりでなく、よるべなき狂人の生涯を憐れむあまり、滅罪生善のために夜毎に一座の施食會を營んだのである。

信 仰 相 談

四十九餅

(問) まことに變なお尋ねで御座います、私は或る寺の小僧でして、檀家の人に次ぎのやうな事を聞かれて困つてしまひましたが、教へて下さいませうか。

一、何故死んでから四十九日目、何故死んでから四十九日目の日に四十九の餅を上げるのですか。

一、私達は朝夕本堂でおつとめをしておりますが、念佛の時に少しも有難い氣持のしたことが御座いませんが何故でせう。(或る小僧)

(答) 御尋ねの「四十九餅」の事は随分古い習慣ださうですが、其起原は分明でないと云はれて居ります。それに關する典據もないさうです。慈覺寶庫と云ふ本に「福田集要に曰く四十九の餅は人間四十八の大骨五體五輪

を表すと謂ふ。七七日過る日は中有より他界に託生する時なるが故に、此餅を以て四十八の大骨を依け補ふ意なり。一の大餅は人間五輪の總體に當つ」と云つて居ます。一體中有とか中陰とか云ふことは其有無に就て昔から議論のあつた事で、俱舍宗では「一定の中陰あり」と云ひ、ひ、成實宗では「無い」と云ひ、一般大乘佛教では「有無不定」と云つて居ます。即ち極善極惡の二つは中間がなく直ちに生處が定まつて仕舞ふけれども、それ以外は此中間存在がある」と云ふのです。「有」と云ふことは存在と云ふ、「陰」と云ふことは蘊即ちかたまりと云ふことです。俱舍論に「中間所有の蘊なればなり」と云つて居ます。それが何故七日を以て數へられるのか、調べる暇がありませんから手元の材料だけで申上

げますと、梵網經に「三七日四七日乃至七七日亦應讀誦講說大乘經律」とありまして、七日七日に追善をするやうに云つてありますから、何かから云つた説があるのかも知れません。佛教辭典には「七日を以て一期とし本生處に生ず。若し七日の終に生緣を得ざれば更に中陰の續くこと七日、第二七日の終に本生處に生ず。此の如く七日を以て一期として最も長きものは第七期に至り、第七期の終には必ず一處に生ず云云」とあります。瑜伽論と云ふ書物にも「七生七死とて七日七日に死して業力を以て生ず」とある相です。隨願往生經には「命終之人在二中陰中一身如二小兒二罪福未定應爲修福願亡者神使生三十方淨土」とあり中陰の追善と云ふことが行はれた事實を物語つて居ります。また我

國で行はれたのは聖德太子の時か、だと云はれて居ります。禮綱本紀第四に「吊奠の儀は第七日第二七日乃至第七七日第百箇日一周年第三年第七年第十三年第十七年第二十三年第二十七年第三十三年は天子より庶人に至るまで一同にして差ふところなし」とあつて此内の百箇日と一周年と三年とは支那の禮儀によつたものだとの事です。次に御念佛して居ても有難い氣持のしないのは何故かと云ふ御質問ですが、親鸞上人の御弟子の唯圓と云ふ人もそんなことを尋ねて居ります。委しくは歎異鈔を御覽なさい。求道心が本當に起つ、色々やつて見たが結局自力不可能と云ふことが判つて如來縁にすがらざるを得なくなり、如來本願力の大慈悲をシミジミと味ひ得た時、初めて「有難さ」が判るのでから、

信 仰 相 談

念佛したら誰でも有難くなるのは定つて居りません。況して御役目御苦勞で「嫌やだが仕方なし」と云ふ念佛にチヨクラチヨツト有難くなる譯がありません。然しそれでも結構ですから、其念佛の時「信仰を得させて下さい」と云ふ願を一聲一聲に籠めて御念佛して居りますと、何時か屹度シミジミと有難さを味ひ得る時が來ます。また或る御弟子が御念佛して居る時有難さの涙が出ないが何う云ふ譯かと尋ねた時、法然上人は「信仰と云ふものは涙が出る出ないに依るものではない、涙の出るのは悲喜歡喜と云ふもので信仰の感情であるから、感情が高潮すれば出る事もあらうが、出ないからと云つて何も心配する必要はない。要は三心が具足して居るか何うかにある」と云ふやうな意味のことを云つて居

られますが、本當にお母様にでも呼びかけるやうな氣持でお念佛が出來たらよいのです。かうした御念佛がしたあとで、始めて喜びを感じ「あゝ有難い」とか「嬉しい」とかの感情が湧いて來て「攝取不捨」の御慈悲を味ふことにもなるのですから、有難い氣持を要求するよりも「一向に念佛すべし」の御遺訓のまゝに念佛して下さい。

(中村辨康)

知識と悟り

(問) 釋迦如來があかつきの明星と共に悟りを開いた、菩提樹下に於いておさとり遊ばした。等々。どの書物を拜見しても同じ様に書かれて有りますが全體如何なる事を悟られたのでせう無常とか人生は苦とか、正しい道を歩む事が大切だと云ふ位は別に如來様がわざ／＼悟られ

なくても既に御存じの事でせう。我々の如き凡人でさえ知つてゐるのですから、全體如來様が何か御胸にこれだと御氣付きなされたのではないでせうか。

(北島生)

(答) 釋尊が轉迷開悟せられたといふ上には、きつと貴方の言はれるやうに、これだといふ點がおありになつたと存じます。それあればこそ、生死を解脱せられたのでありませう。しかし、貴方の言はれるやうに、無常とか苦であるとか八正道とか、と

いふことが、將して別に先哲の悟りを待つまでもない事柄でせうか。私共は永い佛教との接觸に依て、それらのことを概念的によく分つたことのつもりでゐますが、はたして大聖六年の悟みに惱める程の心持で、此等の事實を痛感し、そして解脱を求めたでありませんか。無常を悲み、煩惱の深さ、迷妄の闇の濃さに悩み、この小なる自己の存在の、常に死に脅され、常に我執に押し流されてゐる、あはれさを、悔めさを、見つめて、大いなる道、我執我惑を滅し去つた大生命に氣付き、それに合致した時、始めて、無常と苦とを知り、無我と慈悲との新しき生へ高められ、小なる存在としての生死の苦流を克服し超過し得たと、言ひ得るのでありますまいか。それは天地廓然として一に合したともいはれる境地でありませう。それは概念、知識に依る救ひではなく、自己の全生命をかけての聖き求めから來る悟りでありませう。釋尊の解脱に至る以前の心境は、それ故「聖求」とも呼ばれて居ります。貴方自身、この聖求を把握して下さい。

千手觀音



小島健三作

貫三郎

唐招提寺ができあがつて、鑑真一行がひき移つたのは、天平寶字三年夏のことであつた。

鑑真をはじめ、一行の者はすぐ律宗をひろめ、彫刻家（僧侶）は佛像をきざみはじめた。

夏の夜更け唐招提寺の彫刻場からひびいてくる槌の音は、虫の音とともに夜明けまでつゞいてゐた。

第一に發表されたのは、安如寶の藥師像であつた。唐招提寺一派の法進、曇靜、思託、義淨、法載、法成、仙童、軍法力、といふ唐の彫刻家を尻眼に、安如寶は、藥師像を發表した。

日本の人々をはじめ、彫刻家たちを「あつ」と、ばかりに驚かしてしまつた。

今までの日本の彫刻法を無視した、日本の人たちにとつては、夢にさへ思はなかつた、全然別種の藥師像に、人々は眼を見はつたのであつた。

日本の神祇部國麿、猪名部百世、益田繩手、國中連公麿、高市眞國、高市眞呂、柿本小玉、などといふ彫刻家も、突飛

な、唐の彫刻法に呆然としてゐるばかりだつた。

つゞいて、義淨の乾漆像ができあがつた。鑑真の律宗教義を、この像で具體化されたといふ乾漆慮舍佛を義淨が發表した時には、日本の工匠は指一本とさゝせなかつた。

日本の彫刻は、唐の佛像にその影を滅してしまつたと言つてよかつた。

つぎに思託の千體釋迦ができあがつた。

「清榮、思託の千體釋迦を見い。わしは、こんな立派なものを見たことがない。そちは、どう思はれる」

晋照がさう言つた時、清榮は、ちつと唇をむすんで、いつまでも返事がなかつた。

大蓮華上に結跏趺坐して左手を膝上に安じ、右手をあげて大中の指頭を捻じた千體釋迦は精巧緻密の極をきわめたのであつた。

一どその前に立つた日本の人々をして、讚歎賞美の聲をもらさぬ者はなかつた。

つゞいて、獅子吼菩薩が發表された。

法載が長い沈黙をやぶつて、唐招提寺風の手法をもつとも濃厚に、深刻に表現した慮舍那佛の雄偉さには、日本の彫刻家は、手も足も出なかつた。

少女の夢の深山に
次女を消した清榮



だが、清榮は、すこしもそれらの佛像にたいして心から感心はしてゐなかつた。「唐の彫刻法を一步もでてゐない」と思つた。

義淨、思託、法載などの佛像は、唐でその道の研究をしてきた清榮の眼には少しも、驚異ではない。むしろ、日本古來の佛像の方が數等優雅さがあるではないかと、叫んでやりたかつた。

唐招提寺の人々は、眼がありながら、日本の佛像を少しも見えてゐないのだと思つた。

清榮は、唐招提寺風の作品からは、なん等の同感も共鳴も得ないばかりか、唐の手法をうつすに過ぎない彼等にたいして、憎惡さへ感じた。

それよりも、清榮から見た日本飛鳥の美術はどんなに尊敬に値したかしれなかつた。三韓で醇化され、日本に傳はつた美術は、ながく密閉と養育と修練とを重ねたその技倆は、唐の手法などとは比較



母目三郎

にならない美妙さと幽嚴さとがあつた。

「三月堂の主尊、不空羅索を見るがい。崇高な手法は、印度や乾陀羅の手法を加味してゐるやうにも、またビザチンや、アラビヤの気分までもふかく蝕ひいつてゐるやうにも思はれるではないか」

清榮は、日本から選まれて晋照や、榮観に従つて渡唐し、佛像をきざむ修業をして來たが、槌をもつ氣にも、鑿をにぎる氣にもなれなかつた。

「唐招提寺の佛像など、犬に喰はしてやるがい——」
と罵つたし、

「この日本の幽嚴な美術が眼にはいらぬのかッ——」

とも怒鳴つてやりたかつた。

唐で彫刻を教へてもらつた安如實に、清榮はくつてかゝつたことがある。

「師匠、日本に來たからは、日本古來の美術を研究するのが當然ではないか、それを、唐の彫刻法をそのまゝ、佛像にきざみつけるとは何ごとだッ」

と、かみつくやうに叫んだこともあらう。

また、日本の師匠晋照に、
「晋照さま、なぜ、日本古來の彫刻法を

唐招提寺の奴らに見せてやらないのです」

と、はげましたこともある。

だが、自分自身でもわからない腹立しさが、費くりかへるやうに身體中をかけめぐつた。

「うむ、わしは、日本大乘の美術に、わしの靈をぶちこんだ立派な佛像を刻みつけてやるぞッ。唐の美術がなんだッ」
呻くやうにさけんで清榮は姿を消してしまつた。

安寧の深山に靈木をえてそれに第一の槌をふつてから四年目の冬が訪れて來た。

清榮には、花の笑ふ春も、燒きつくされさうな夏も、夏のやうな寒風も身にこたへなかつた。

彼の頭には、たゞ日本美術を完全に表徴した千手千眼觀自在菩薩の幻が描かれてゐるばかりだつた。

清榮は、その幻を見つめては、夢遊病者のやうに鑿を握り、槌をふつてゐた。

岩間にむすんだ庵は、落葉にうめられ、それが、やがて淡雪にかはつても、槌をふるう音ばかりは、晝となく、夜となく森や谷間にこだましていつた。

清榮の頭に描かれた千手觀音は日をへ、月をかさね、年をつんでゆくごとに、その幻は根をおろし、枝葉をひろげて行つた。

千手觀音の四十手に執持する如意珠、羅索、寶鉢、寶劍、合掌の二手、跋折羅、金剛杵、施無畏手、日摩尼、の十手をきざむに一日のやすみなしに四年の年月を費した。が、彼の心にはすこしのゆるみも、倦怠もない。

「うむ……唐招提寺めツ。安如寶めツ。唐招提寺派がなんだツ。師匠安如寶がなんだツ。日本古來の佛像を、この清榮が、今に見せてやるぞツ」

清榮には、來る年も、來る冬も、そこに少しの間斷なく槌をもつ

たまゝに眠り、鑿をにぎつて起きあがつた。

それから二年を経て、月摩尼、寶弓、寶箭をきざみあげ、清榮が唐招提寺をわすれたやうに夢にうつゝに幻を追ふて結根をうちこんで行つた。

幻として描かれてゐた千手觀音は、彼の瘦せ腕によつてものゝ美事に、その姿を現世にあらはして來た。清榮の心は勇躍した。

揚柳、白拂、胡瓶、檳榔、鐵斧、玉環、白蓮、青蓮、寶鏡、紫蓮、をきざみあげ、彼はよろこびに胸もはり裂けさうであつた。

清榮は、できあがつた千手觀音の前に、釘づけにされた像のやうに動かなかつた。

落ちくぼんだ眼からは、とめどもなく嬉し涙が流れ、のびるにまかせた蓬々の頭髮の中に顔をうめて、しばらくは、狂人のやうに、「できたツ、できたぞツ——日本古來の美術をわしが、靈によつて再現した千手觀音が出來たツ——」

清榮は泣き叫んだ。

安寧の都は、音もなく暮れて、秋の虫が寂しく鳴いてゐた。

星がきら／＼と輝いて、夜鳥がチ、チ、と鳴き渡つてゆく。

千手觀音には、「天人の作」と刻んで、白布をかぶせ車にのせた。

清榮は、燃ゆるやうな希望と、満足とにひたりながら、人目をし

のんで、唐招提寺へとはこんだ。

そして、寢静まつた寺の廊下に、こつそりと千手観音をおいた時に、捜せほうけた清榮の顔には、喜悅の涙が光つてゐた。彼は、魂を奪はれた人のやうに、ふらくと秋篠川のほとりに足をはこんだ。川は、今までの彼の心を洗ひ清めるやうな囁きをつゞけてゐた。清榮は、そこに坐らうと思ひながら、うつ伏しに仆れてしまつた。

三

眼をさました清榮は、久しく逢はなかつた師匠安如實と、音照を思ひだして、唐招提寺へと歩いていった。

彼が歩いてゐるうちに、彫刻場の方から何やらはなし合ひながら走つてゆく人々とすれちがつた。

眼をあげると、多くの人々が表口の方から列をなして、この寺をめがけて押かけてくる。

清榮は、彫刻場から来る人々と一緒に、ぼろ／＼の衣服のこともわすれて表の方へついて行つた。

唐招提寺の廣場は、黒山のやうな人だかりだつた。殿堂からあふれた人々は押しあひへしあつて、喚きたてゝゐた。

清榮もその人々の流れに押されて、殿堂へ流れて行つた。

「見たものは、早く出ろッ——」

「押しちやあぶないッ」

ふと、清榮は、これ等の人々は、自分の千手観音を見物に來たの

ではないかと思つた。

「何を見に行かれる？」

喜怒を忘れた人のやうに、清榮の顔は硬ばつてゐた。

「なにを見にといつて、お前さんは？」

「わしは、みんなに押されて、こゝへは入つたまでだが……」

「はつはつ……これは暢氣な人だ。天人がつくつたといふ千手観音を見物に來たんだ」

「えつ——千手観音を……」

清榮は、ながい波れもわすれて大廣間にでてしまつた。

そこには、冠をつけた輕装の都人が、波のうねりをつくつてゐた。唐招提寺の彫刻家をはじめ、日本の彫刻家は、突如としてあらはれた千手観音の前にいろ／＼の批評と、評議をこらしめてゐた。

清榮は、息づまるやうな思ひで近づいて行つた。

義淨は、老の眼をちツと像に注ぎながら、

「わしの師匠は、一生に一ど、腕に自信ができたなら千手観音をきざんでみるがい」と、言はれたことを今でも忘れぬが、恥しながら、

わしには今なほ、千手観音を頭にゑがきだすことができぬ。この千手観音を見ると頭が下る」

清榮の胸は、わけもなく躍つた。ながい間の沈黙も、ながい間の屈辱も一朝にして翻いられたやうな氣がした。

清榮のよろこびは、たゞそれだけではなかつた。

「大和尚さま、天人がつくり、この寺にくだされました千手観音は言葉につくせぬ立派な彫刻でござります。申すまでもなく千手観音は、中央の二指をのぞき、地手は慈悲の力で、一手ごとに二十五有を救済し、四十手に二十五有を乗じて千手にかぞへ、千眼は手ごとに一眼をひらき、地獄の苦惱をすくひ、諸願成就產生平穩を司りますもの、その四十手の美妙さ、唐風ではなく、その一手ごとの神秘さ、わたしは、こんな立派な手法を見たことがござりませぬ」

鑑真和尚を前にして思託のはなしをきいてゐた清榮の心は、天にもものぼる心地だった。

またある者は、

「人は、手二本だが、千

手観音は五十本にもなる

ので、彫刻にどうしても

無理ができる。二本によ

つても調和がとれ、三本

清々、安如宝
と相會する圖



によつても、六本によつても、二十本、三十本によつても調和がとれなければならぬ。どの手も、どの手もことごとく自然でなければならぬ。すくなくとも複雑を統一する鋭敏な頭腦と、神格をそなへる技巧をもたねばならぬ。それを、この像は、完全になしとげてゐる」

と、絶讃するものもある。

清榮の胸に満ちてゐた暗雲は、今日の秋空のやうに、きれいに拭ひとられた。

と、日本の彫刻家の中には「天人の作」とあるところから、馬鹿げた噂をたてる者があつた。

「これは、唐招提寺にゐる彫刻家のうちで、唐招提寺風の佛像にあきたらず、日

本の手法をまねた者が、自分の名を出すことができません、天人の作と銘をうつて唐招提寺にまつりこんだものにちがひない」

この噂に、清榮の眉は急にくもりだした。清榮にとつては、夢にさへ思はないことだつた。

日本の手法が多分に唐の手法には入つてゐるところから、噂は噂をうんでいつた。

千手観音をつくつた天人といふのは、神護部の一弟子圓慶にちがひない

といふものがある。神護部が、自分の息子にばかり秘傳を教へ弟子をかへり見ないところから、七年前、

「師匠がなんだ。わしは一人で立派な像をつくつて見せる」

といつて、行衛不明になつた。

その圓慶が名を秘して「天人の作」として、この千手観音を發表



したに相違ない——まことしやかにいふ者がある。

清榮の眼の前が、急にまつ暗になつたやうな氣がした。

「この眼の前にある千手観音は、わしがつくつたのだ。ほかの誰でもない。この

清榮ではないかッ——だが、この一間と

はなれない前にある自分のきざんだ千手観音にいかなる批評

をくだされやうと、

いかなる作者の名をつけて噂されやうと、それに對してなんの力をも持ち得ない自分が、たまらなく寂しかった。

清榮は、ひよいと臺の上に立つてゐる千手観音を見た。日本美術の極致に、自分の全生命をぶちこんだはずの像の上に、彼は寂しい視線をなげかけた。

四

清榮の視線は、千手觀音の天衣の上をすべつて臺の下に、埃をあびて頂垂れてゐる師匠安如寶のきざんだ藥師像の上に落ちていつた。

ふだんなら、さほどに注意もひかなかつた藥師像でありながら、今の清榮には泌々なつかしさが湧いてきてちつと見つめた。

そして、藥師像の天衣のところまで彼の視線がすべつていつた時、清榮の眼は、電氣でも感じたやうに跳かへされた。彼はおそろしい驚愕を覺えた。身體中の血潮が一時に、かつと顔にのぼつて来るやうな氣がする。

「おゝ、師匠の藥師像がツ——」

彼の驚愕は火のやうに燃え熾つた。

自分の刻んだ千手觀音の天衣にあてた鑿のつけやうと藥師像の天衣とが寸分の差もないではないか？

「わしの身命を賭してきざみあげた千手觀音は、師匠安如寶が教へた佛像の手法を一步も出てはゐない」

清榮は、奈落のどん底につき落とされたやうな氣がした。再び、自分の千手觀音を見あげた。

「たゞ、わしが日本人だといふだけのことではないか、日本の師匠晋照から受つた日本古來の手法で、唐の佛像をきざんだにすぎないではないかツ——」

清榮の血潮は逆流する。

「輕侮しきつてゐた唐の佛像を日本人がきざんだだけのことだ」

もう一顧さへされない師匠の藥師像にくらべて、どこに千手觀音が優つてゐるといふのかツ！ 清榮は、狂人のやうに眼をうつろにしてあたりを見た。

「わしは、師匠安如寶にたいして、たとへ一日たりとも罵つた思はずだ」

清榮は、ゐても立つてもゐられないやうに板もとめてあたりを見た。

「そればかりではない。晋照にたいしてもわしはすまない」

ふと、あげた眼に、師匠安如寶は、清榮の千手觀音を、ちつと見つめてゐるのを見た。長い間見ない師匠の風采にひきつけられて、

「おゝ、師匠——」

と、呼ぼうと思ひながら、聲がつまつてでない。

安如寶も清榮も、釘づけにされた像のやうにうごかなかつた。清榮にしては、息づまるやうな瞬間がつづく。

しばらくして、安如寶の視線が、千手觀音の天衣のあたりまですべつていつた時、かたくむすばれた唇が、急にほぐれて、げらげらと嗤ひだした。

五

氣をとられてゐた清榮は、棒かなにかで不意に叩かれたやうに、くら／＼ツとした。

安如寶の失笑は、それほど強く彼の心に喰入つたのだ。

清榮は、もう一刻もその場にゐたゝまらなかつた。彼は、人をおし分けて轉げるやうに殿前の廣場に出た。

小さい時から育てあげられた晋照にそむいたといふことゝ、安如寶を裏切つたといふことで、氣が狂ひさうであつた。

「清榮——」

と、よぶ者がある。

それから、靜かに肩をたゞく者がある。

「清榮、立派なもんだのう——」

「え、えつ——」

そこには、安如寶がたつてゐた。にこやかに笑ひながら、

「そちでなければ出来ない作ぢや。立派なもんぢや」

「あれが、……師匠……面目次第ありません」

「いゝや、さうではない。日本人のそちが、唐の手法を學んではじ

めて出来た千手觀音だ。だが、思託や藤淨や、その他の人々のやう

に、あの千手觀音には、わしは感服せぬ。そちはわしの眞似をし、

晋照どのゝ手法を眞似てゐる。ところが、そのわかるのは、わしと

晋照どののほかはあるまい。もう一どやり直して見る氣はないか？」

「えつ——」

「もう一ど、唐の文化を見なほして、しつかりと自分のものを生かして見る氣はないか？」

「……」

清榮は、頂垂れたまゝぢツと動かなかつた。

それにひきかへ、千手觀音は、作者の清榮などの苦惱に見むきもせず、人氣をあつめ、その名をひろめていつた。作者が、天人だといふところから、途方もない噂が立ち、それがいやが上にも名聲を博していつた。

すみ渡つた秋の日だつた。

師匠安如寶と晋照に見送られながら、清榮は、遣唐船の舳に赤毛氈にくるまりながら、水平線の彼方をさびしく眺めてゐた。

「清榮、元氣をだして行つておいで、お前の仕事はこれからだぞッ」

晋照の聲に、清榮は、屹ツと立ちあがり、

「師匠、いつて参ります。きつとやりとげますぞッ」

やがて帆があげられた。

それから、安如寶も晋照も名残をしげに船からおりた。赤毛氈につゝまれた清榮を舳にのせて、靜かに／＼遣唐船は三津の濱を船出した。



奥様と女中さん

田中法善

人を使ふと云ふことは使はれる人からすれば、何んのことはないやうであるけれど、使はれる人から喜ばれて働いて貰ふやうに使ふことは、たやすい業ではない。近頃の人のやうに、少し無理や小言を云へば直ぐに膨れ上り、可愛がれば、直ちに増長すると云つたやうになつた今日は、寧ろ使はれる人よりも使ふ人の方が餘程苦勞が絶えないのです。と云つて使はれる人でも亦云ひ知れない苦勞はあるものです。

人を使ふと云ふことは使はれるうに働くことは之れ亦六ヶ敷いこととて、今日のやうに働いてもく給金を出してゐるから働くのは當り前だ位ひに思つてゐる方の少ない時代には、働く人にも並々ならぬ努力が要るのであります。いづれにもせよ使ふもの使はるものがお互ひに満足して一日の勞務を果して行かうとするには、言ひ知れぬ苦勞が伴ふのものです。それは使ふ人、使はれる人の立場の相違からとも云へませうが一番大きい原因はお互ひの間に勞務に對する感謝の念がないところに生じて

來る惱みであります。一方が使つてやると云ひ、他方が働いてやつてゐると云つてゐる間は何時までたつてもこの惱みは付き纏つてゐます。世間では現代は既に温情主義の時代ではない、勞働と賃銀の交換の時代だなどと云つて、之を家庭に於ける女中さんの仕事にまで取り入れやうとする亂暴極まる人もあるやうですが、之はもつての外で、家庭と女中さんの場合に限つてはどこ迄も温情主義を中心として行くことが肝要であります。一口に温情

家庭ノート

洗濯の仕方

これからは洗濯物がずつとふえますが、それだけに時間と費用とを節約して最も効果のあがる洗濯の仕方を選ぶべきです。

絹物

絹布はアルカリ性に弱いから、アルカリ性の強い石鹼や洗濯曹達の使用をさけ、ラックス、またはマルセル石鹼三十瓦を六リットルの微温湯に溶した洗濯液を用ふる。先づこの液の中に十分間ほど浸し、毛の柔いブラシで軽く手早く全面を擦りよく振り濯ぎした後、温湯で二三回すすぎ、石鹼分が充分に落ちた後、水濯ぎして乾かす。この時手でしぼると繊維を損ねるから、手で水をおすぐらひ

使はれる人十訓

主義と云へば直ちに封建時代の從屬的な見方をして、如何にも使はれてゐる人は使ふ人の温情に生きて行き生活してゐるかのやうに考へるのでありますが、温情は決して使ふ人々のみにあるべきではありません。使はれる人の胸の中にも温情がなければ家庭の仕事は氣持よく運ばれるものではありません。お互の間に温情が湧き出で、こそ、そこに明朗なる感謝の世界

が開けて來るのであります。女中さん勤めを單に賃銀に對する勞働だなど、考へるのは大いなる誤りであつて、どこまでも「奉公はわが身のための奉公ぞ人に奉公すると思ふな」と云ふ心境で職務に勵むことが肝要です。

そして、別に掲げてある十訓の如き訓へ條を胸にいだいていれば、假令時として嚴格に過ぎるやうな處置を受けても、又思ひもよ

らぬ小言を云はれても直ちに反抗心を起さずに

憎んでは打れぬものなり笹の雪と反省する氣持ちになつて、自ら主人に對し感謝の念が生じて參るのであります。

又使ふ方では、使つてやつてゐる、世話してやつてゐると云ふが如き優越的な氣持ちを捨て、之れ亦働いて貰つてゐると云ふ感謝の念を以つて臨む時、そこには

自らは使はれる人に報恩の念を起さしむるものであります。

奥様の擇は家のしめくゝり

と自ら陣頭に立つて一家を支配し、雇人の指導に當るべきだと思ひます。

切である。

一、奉公に來た日の心

いつまでも忘れず爲せ

一、うそつかずかげひな

たなく誠もて骨惜し

一、居眠りてあたら夜毎

を過ぎずに目あきては

片意地と短氣不律義う

一、食事をばなすたび

ごとに味うて見れば

一、座様によきことあれ

ばおのれまた及ばぬま

一、主親は無理いふもの

るな言葉かへすな

一、箸とらば天地御代の

御めぐみ父母や主人の

恩を味へ

一、八百のうそを上手

にならべてもまこと一

自ら使はれる

人に報恩の念を

起さしむるもの

であります。

奥様の擇は家の

しめくゝり

毛織物

毛織物は動物纖維で作られてゐるため、アルカリ性に弱く、ために洗濯すると

収縮する性質があります

から、一般的にはアンモニアまたは少量の洗濯曹達

を用ひるにとゞめ、微温湯

の洗濯液で、なるべく手早く、揉まないで、ブラッシングにして、乾かすことが大切である。

木綿類

木綿類はアルカリ性に對しては比較的強いから、洗濯法としては洗濯曹達や苛性曹達を用ひての煮沸洗濯も良い。

但し紺地類の場合は曹達を用ひないで汚れた部分のみ石鹼を付けて手早く揉み洗ひをし、水洗ひを十分にし、裏返しにして風通しのよい、日影に乾すのが大切である。

信 仰

體 驗 談

濁 流 に 祈 る

念 佛 て 助 っ た 話

鶴 田 湛 泉

それは、思ひ出してもぞつとする昨年九月二十一日早朝の事であつた。

豪雨は棒片で叩くやうに雨戸に烈しくふきつけてゐた。風は、野獸の咆吼のやうに、物凄いうなり聲を立てゝゐた。大きな木の葉の如く散つてゐるのは、屋根の瓦だ。それが、大地に叩きつけられて破れる音がしきりに聞えた。

その中、ゴーツと異様な響が聞えたかと思ふと、濁水が凄い力で、家の中に浸入して來た。

に、見る見る中に、床までついて來た。
「危険だ！ 外へ出よう！」
力松氏は、妻女を促しながら、身に一物も

付けず、着のみ着のまゝで、戸をこぢ明けて外へ飛び出した。

そこに、日頃見馴れた美しいアスファルトの大道は、どこかへ失せてしまつて、滔々たる濁流だ。歩まうとしても、流れが早いために、足が動かない。そのまゝ立つてゐても、足が拂はれそうだ。二人は、やつと、互に手を取つて助け合ひながら、にぢるやうにして歩いて行つた。水は、一步步毎に増して行くのが見える。膝ぎりであつたのが、やがて腰を没し、乳を埋め、終に首まで來た。

最早や絶對絶命となつた時、力松氏は妻女のかうさんを、小脇にしつかとかゝえて泳ぎ初めた。それは懸命の努力である。二人の間

には、死なば諸共との覺悟が暗黙の中に語られてゐた。

そこから一面は、全く濁水の海である。色んなものが、あちらこちらと浮んでゐる。

「これを確かりもつてゐるよ！」

力松氏の言葉に、かうさんは傍へ流れて來たタンスの箱の引手を兩手で握つた。これでやつと二人は、樂になる事が出來たので、ホつとした。

前方は、どこかの川の土手であるらしく、松の木に、よぢ登つてゐる數人の人が、風にふり落されまいとして、死ものぐるひでしがみ付いてゐるのが見えた。

突然、力松氏は、

「痛い！」

と叫んで、頸に手をあてると、水の中にそのまゝ姿を没した。それは、大きな材木が當つたゝめであつた。あふりを喰つてかうさんも、波に捲きこまれて一度底に入つたが、再び上つて來た。命とたのむ箱は、材木のため破壊されてしまつてゐたが、幸に、今度は

更に力強い材木にすがりつく事が出来た。

その時二人は、五六間も隔たつてゐた。力松氏はかうさんの方へ近づかうと、懸命の努力を拂つたが、却つて潮のため遠ざかつて行くのだつた。これが或は今生の見おさめになるかも知れないと、悲壯な覺悟で、互にちつと凝視してゐた。

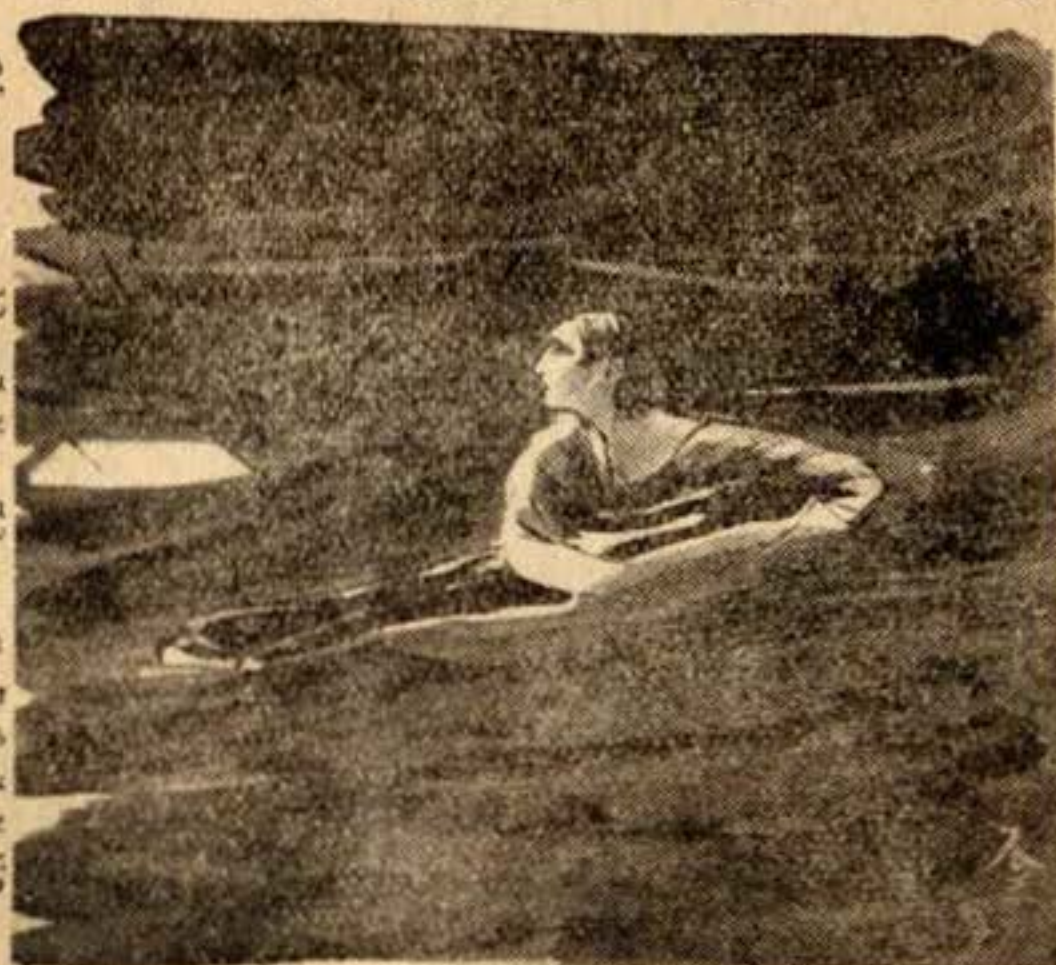
再び魔のやうな怒濤が来て、水中に吸ひ込まれた。水面に浮び上つた時、かうさんは、先づ夫の姿を捜し求めた。が、以前居た所には見えなかつた。不安に驅られながら、波の上を捜し求めると、遙か彼方にそれらしき姿を發見し得た。何よりも早く自分の安全である事を、夫に知らせようと手を振り上げた。それに應ずるやうに、彼方からも手が上つた。それは、共に生きてゐる事を知らせ合ふよろこびの相圖だつた。

次いで三度波に捲き込まれた。いよくこれが最後だと觀念を定めてゐたが、不思議と又浮び上つた。

が、今度は、どつちを捜し求めても、夫の

姿は見出せなかつた。一種云ふ事の出来ぬ寂しさを覺えた。

唯一の頼りとしてゐた夫の姿を見失つてしまふとかうさんの口から、自然と稱名の聲が



溢れた。一心に彌陀を念じ、南無阿彌陀佛と稱へ出したのだつた。けれど、それは勿論、何とかして助かりたいがためのものではなかつた。そんな心は毛頭もなかつた。助かりたいところではなく、これまでも、餘りの苦し

さに、一思ひに波に捲き込まれた刹那息を絶つてしまひたいとさへ思つた程であつた。それは、全ての自分の運命を彌陀にゆだねたい念願であつた。只彌陀の廣大な慈悲の御手にすがりたいための心からの念佛であつた。これが唯一の希望であつた。そしてこれこそ純粹な信仰の極致であると言ふべきだ。心靜かに念佛を唱へてゐると、少しは身體も樂になつたやうに覺えた。暫くして、どつと大きな波が來たと思ふと、そのまゝ深く水中に捲き込まれたのだつた。

× × ×

それから幾時間経つたか知らないが、今度は氣が付いた時には人々の手厚い看護を受けてゐた。力松氏も脚に大きな傷を受けたが、幸ひ助かつた。全ての半生の貯へを水に流しはしたが、この世で再會する事が出来た大きな喜びを、二人は、深く彌陀に感謝の祈りを捧げたのだつた。

この物語は多賀井力松氏夫妻から直接に聞いた遭難實話である。

釋新語法人上然法

草 ひ ふ あ

康 辨 村 中

師の話はつゞく。

「近頃は、我國も大分「内面的な道」へ注意を向け初めましたね。

非常によい傾向です。

之も滿洲事變に關連して國際聯盟を脱退した爲めに、何うしても自分、自らに生きなくてはならなくなつたからでせう。

民族團結主義から、日本精神の再檢討となり、今更乍らに國體觀念の明徴でなかつた事が判り、世界に比のない日本文化と云ふ家寶を、藏の中奥深く仕舞込んで居た事に氣が付いて、謂ゆる「東洋ルネッサンス」の時代が來たのです。

獨逸の文豪カイザリンクは云つて居ります。

「東方の極點である日本は文化の至深所である。今や日本の精神文化は、西方の哲學者思想家の胸中に君臨するに至つた。今迄、諸民族に依つて貢獻せられて居た日本は、是からは諸民族に貢獻せねばならぬ義務がある。此意味に於ても、日本は世界文化の王座に君臨すべき時が來たのである。否な世界は日本の文化を熱心に求めつゝあるのである」

と云つて居り、波斯バハイ教の第二祖アブデユル・バハは

「今後に於ける新らたなる文化は日本から起るであらう」

と云ひ、英吉利評壇の權威であるステットは

「日本は世界に於て最も理想的な國家である。同時に最も完成され

玉成された文化を生み出すべき美しき國である」
と云つて居ります。タゴール翁の如きも

「日本は古くして新しい國である。我々の東洋には立派な精神文化があるが、之を完成するものは唯だ獨り日本丈であらう」

と、大きな期待をかけて居ります。

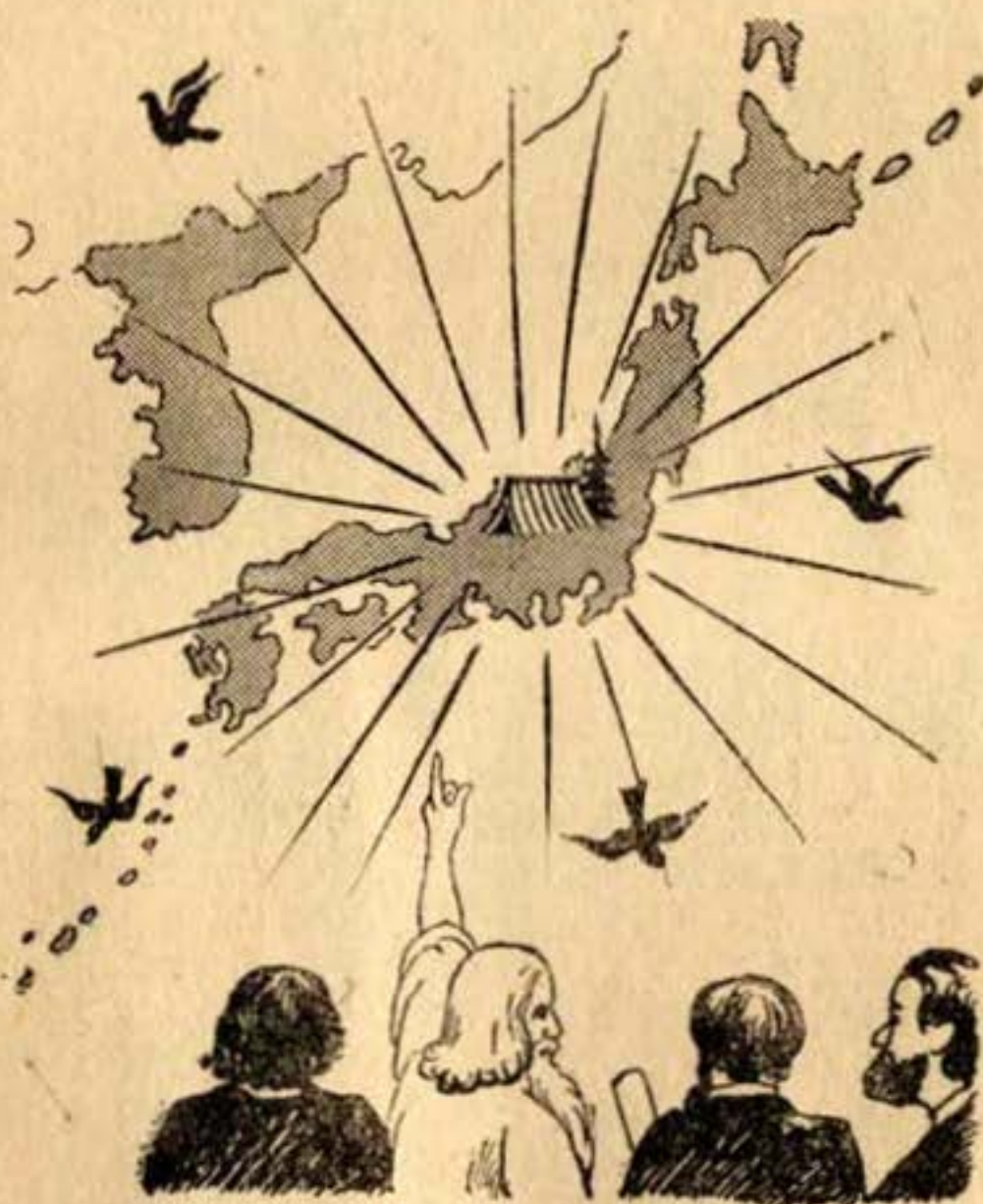
かう云つた外國人の日本に對する賞讃の言葉は、拾ひあげればまだまだ澤山ありますが、近來は特に外國人の間に「日本研究」と云ふ傾向が多くなつて参りました。

メーソンなどの「神道研究」

も其一つでありますが、御存知

のやうに、我國の文化史から「佛教」と云ふものを取り去ると、誠に淋しくなります通り、國民の精神生活に對する佛教の影響と云ふものは、實に非常なものであります。別けても一般庶民の間に知らず知らずの内に浸み通つたもの

今後に於ける新たなる文化は日本から……



は、弘法大師の眞言教と、法然上人の淨土教思想だらうと存じます。其仲でも眞宗の十派、淨土宗の四派、それから融通念佛宗、時宗、天臺眞盛派等の淨土門系の信徒の數が、

全佛教信徒の約半分弱を占めて居る實情から見ても、如何に平民佛教としての淨土教思想が日本の精神生活に關係が深かつたかを知ることが出來ませう。

カイザリンクは

「驚く可き事は日本の婦人が生れながらにして悉く佛教主義であると云ふ事である。あの柔和な隱忍性と、あの無我的內的性とは正しく佛教主義である」

と云つて居ますが、これなどは私達の今まで氣が付いて居なかつた驚く可き大きな事實であると共に、私達から見ると、成る程佛教の影響だとは思ふが、それは華嚴天台等の理智的佛教の影響とも思へないし、禪日蓮などの元氣のよい宗風を受けたものとも思へない

いし、確かに落ち付きのあるフツクラとした法然上人の人格と其簡單明瞭な信仰との流れを汲む浄土教思想の大きな感化であらうと推定せざるを得ません。

私は私が信じて居るから、外の方から見ると、或は我田引水と云はれるかも知れませんが、世界の宗教の中で佛教が一番正しい宗教だと思つて居ます。それは大概の宗教は個人主義の上に立つて居ますが、佛教だけは自利利他、即ち自分を利することと他の大勢の利益とが渾然として融合されて居ることや、其他精神と物質との兩面を二つに見ないで「物心不二」を強く云つて居ることや、常に「覺」を目的として人々の覺醒を要求して居ることなどを見ますと、確かに一頭地抜いて居るものだと思いますが、其佛教の中でも、日本佛教は印度や支那の佛教と違つて、空理空論に終らず實質的な日本人にあてはまつて居るし、其日本佛教の中でも、法然上人の發見せられた日本浄土教は極めて平民的であり謙虛であり直截簡明であつて、支那浄土教の善導大師の詠歎的な純感情宗教でなく、いのちと云ふ事を主にし、現實生活への充實に中心を置いて最も完全な宗教らしい宗教だと信じて居ます。

ことには從來の佛教が云つた一切の條件を捨てて居りま

す。と云つて單に主觀丈になりやすい精神的な「信」だけではなく、人間の行爲の中で一番基礎的な「聲」を、入信と修養との最低の決定點にして、それに依て心と行爲との二面を調へしめて居ることなどは、實にすばらしいものだと思います。

無論基督教などでも「いのり」として「聲」を修養法として居りますが、基督教のは同じ「聲」であつても、言葉であることとに意味が限られて居り、そしてこれは常に「いのり」であつて、つまりは満たされない要求の連續に過ぎないやうですが、浄土教の「聲」は南無阿彌陀佛といふ非常に複雑な内容を持つものであるばかりでなく、何んなにでも變通自在であつて、或時は祈りともなり、或時は感激ともなり、或時は詠歎ともなり、或時は懺悔ともなり、或時は奮起ともなり、或時は反省ともなり、或時は思惟ともなり、或は感謝ともなり、或時は慰めともなり、或時は歡喜ともなり、或時は談話ともなると云ふやうに、其時々に従つて千萬無量の感情や意志の表現をしますから、非常に複雑な變化を許して居り乍ら、然かも常に一語で統一されて居ます。即ち一即多、多即一の無盡緣起の理に契ふと同時に、佛教通規の戒と定と慧との三つがおのづから、

この「聲」の中に達せられるもので、妙法と云つてよいか、妙行と云つてよいか、宗教行爲として、是れ程完全したものはあるまいと存じます。

ですから法然上人は

淨土一宗の諸宗に越え、念佛一行の、諸行にすぐれたりと云ふ事は、萬機を攝するかたを言ふなり

(法語抄一)

九

淨土の教、

時機を叩き

て行運に當

れり、念佛

の行、水月

を感じて昇

降を得たり

(同二四)

と云つて居

られます。

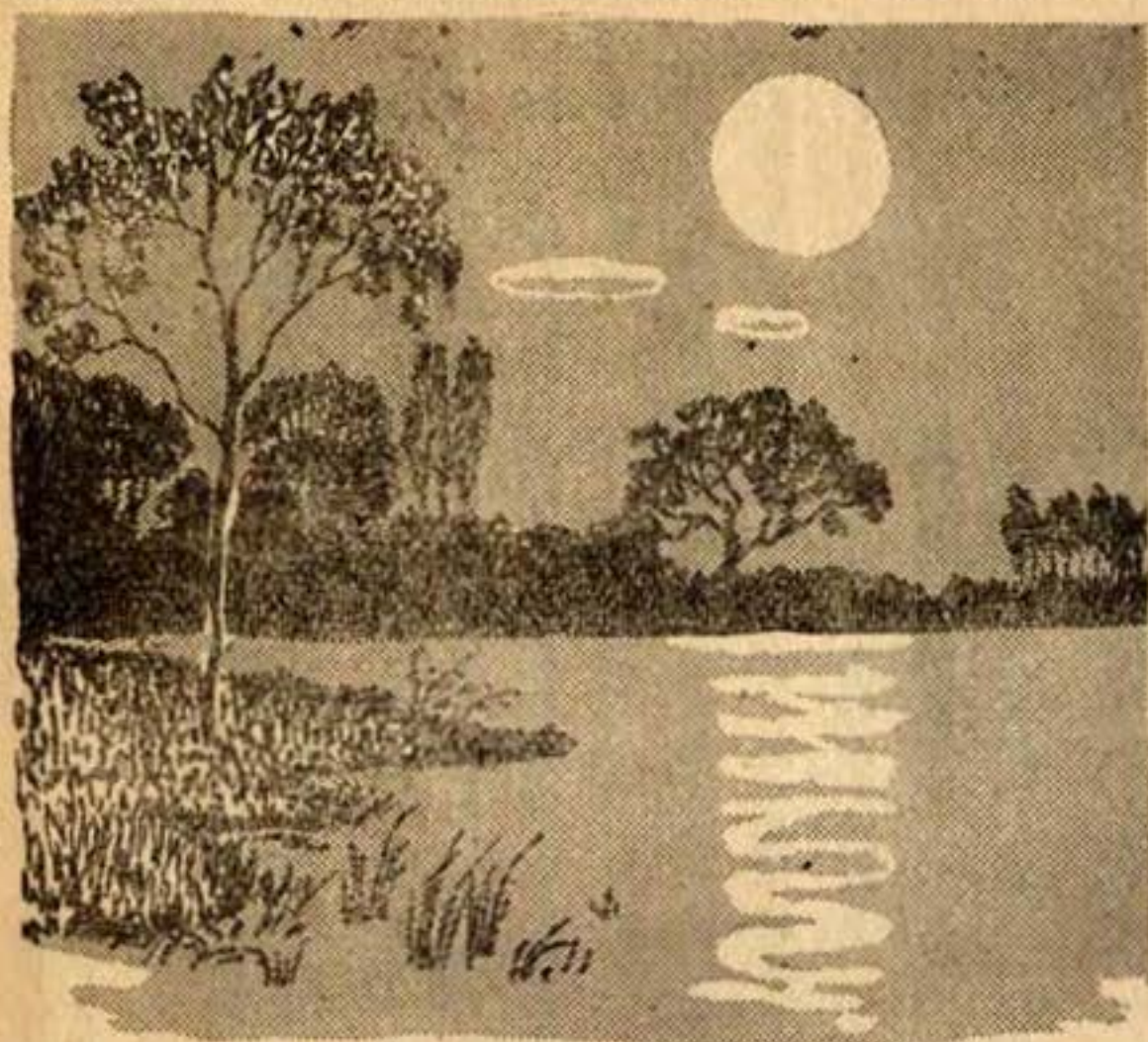
即ち念佛

と云ふことは、一般的に云へば佛を念ずる事ですから、各宗に通じて居る譯であります。イヤ實には人間である限り、此の氣持のないものはありままん。即ち人間めさめを要求し向上を要求しないものはないからです。然しもつと押し廣げて云へば、如何なる生物も此心のないものはない筈であります。

草木にしても新芽が出るのに、何れ一つ上を向いて居ないものはありません。何の枝の何んな少ない芽でも、芽と云ふ芽は皆んな日光の方へと頭を向けて居ます。それは光りを望み命を望んで居るからです。

つまりはそのあらゆる生物の望んで居る命と光りとの完全な實現體が「佛」なのです。佛の内容であるところの菩提涅槃と云ふ印度の言葉の日本譯が光りと命とを云つたものであると云ふことは、何處かでもうお聞きになつた事です。

淨土教に云ふ南無阿彌陀佛の「阿彌陀」もやはりこの命と光との完全な狀態を云つたものです。随つて南無阿彌陀佛は「佛」を一層詳しく説明して居るわけです。イヤ「阿彌陀」と云ふ言葉は、單に命と光だけの完全を意味するに止まらず、本當は「一切が完全だ」と云ふ意味なのです。



じて昇降を得る」ものであります。

ですが、私達の宗教感情と云ふものは、非常に詠嘆的になり易い傾向を持つて居ます。感情が高まれば高まる程、詠嘆的になり勝です。即ち宗教マニアになり易く、非常に熱心ですが傍から見ると氣狂ひじみて居るとさへ思はれます。之は何の宗教にもよくあることで、感情だけが先行するか

水にうつる月のやう遅ひには菩提の月をやとす……

らです。信仰進歩の過程としては一度位は経験して置いても損ではありません

ありませんし、また誰でも熱心になると、其強弱の差はありませうとも、よく

経験することなのですが、大概短い人は一二年、長い人も五六年で落着いて仕舞ふものです。其時、ともすればケロリとして信仰なんて何處で風が吹いて居るかと思ふやうに、スツカリ退化してしまふ恐れがありますから、非常な危険をも孕んで居ります。

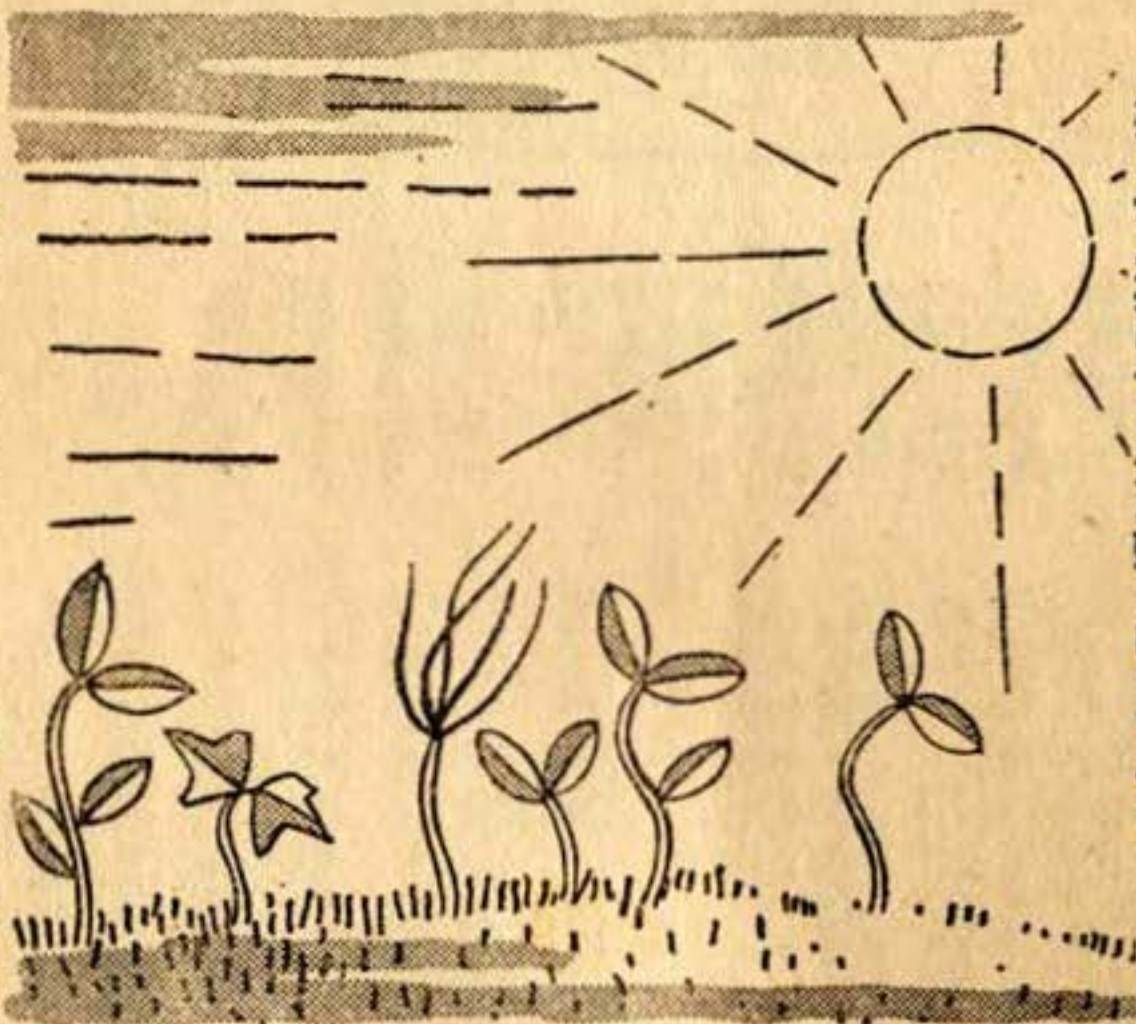
かうなると惡すれのした人生觀に墮して、人を喰つたイケズルイ人格になり「人間道德なんて御都合主義なものだ」と云ふやうに、悪い方へ大轉廻しないにも限りません。ですから支那淨土教の光明詠嘆主義を法然上人は生命尊重主義として、佛の光明よりも佛の壽命の方に重點を置かれたのでした。

阿彌陀とは是れ梵語なり、ここに翻じて無量壽と云ひ、無量光、といひ、また無邊光、無光、無對光、焰王光、清淨光、歡喜光、智惠光、不斷光、難思光、無稱光、起日月光と云ふ。ここに知る、名稱の中には光明と壽命との二義を具へる事を。かの阿彌陀の一切の徳の中には壽命を本と爲し、而して光明勝れたるが故なり(同三六)

凡そ諸佛の功德は、則ち一々に皆法界に遍しと雖も、しかれども餘の功德は遍法界の相なを顯然ならず、ただ光明のみありて、其の理、分明なり。故に諸の功德の中には光明を以て勝れたりとす。

ら、色々複雑して居る人間の要求に應同して居る譯で、單に「南無佛」と云ふ一般的な念佛よりも「南無阿彌陀佛」の方がもつと廣い意味をもつものであり、一層人間的なものである譯です。

元來「佛」と云ふことは、原始的には釋尊と云ふ具體的な偉大な人格者即ち「覺者」に對した言葉であつたのが、釋尊がなくなられてから、釋尊の偉大なる人格を慕ふあまり、其偉大なる人格たらしめた内容こそは、死せざる「佛」であると云ふことに氣が付いて、宇宙觀的な意味での「佛」を考へるやうになり、私達の小さな人生觀をして宇宙觀的人生觀たらしむるべき信仰上の行爲としての「念佛」が行はれるやうになつたのです。だから此の自分を修養せしめる色々な行爲の根柢となる意味に於て「諸行」の上段にあるものであり、且つ宇宙觀的理智と人生觀的情意とを渾一した最も簡單にして最も高潔なそして最も重要な宗教



芽と云ふ芽は皆日光に頭を向けてゐる

行爲として諸行に勝つてゐる譯でもあります。

此の簡單にして最勝なると云ふものこそはすべての人の爲し得らるゝそして爲さざるを得ないものであり、また人間宗教の行爲として、何時でも誰でもがなされ得るものでありますから、法然上人が「念佛は萬機を攝す」とか、或は「時機を叩きて行運に當る」とか云はれたのも、誠に自然の道理を突き止めた上の御言葉だと思はれるのです。

其上に此の念佛と云ふものは、前にも申しました通り人間の複雑した氣持を、全的に表現し得るものですから、念佛して居りますと、色々な感じが心に寫つて來ます。こちらの心水がにごつて居れば濁つて居るなりに、澄んで居れば澄んで居るなりに、中秋の名月が影を萬水に寫すやうに、或は打てば響くこだまのやうに、反省の材料ともなり向上の指針ともなつて、遂には菩提の影をも宿すもので、謂はゆる「水月」を感じ

此のたまされたくない氣持が私を容易に信仰に入れなかつた障礙でもあつたし、且つ私を引きづつて念佛の信仰にまで導いて呉れたものでもあつたのです。』

かう云つて、師は暫く過去を追懐するらしかつた。昔しを思ひ浮べたのであらう。眼をつぶつて黙つてしまつた。

之は私に取つても重大な問題であつた。

だから私は師に失禮だとは思つたが、師の信仰經過を御話して下さるやうに御願ひをしたのだつた。

然し師はきまり悪るさうに

「イヤ、それは非常にお恥しい事でもあり、具體的な御話をするには時間を要する事でもあり、差支へある人の名も

頂く心持

上中甲堂

凡て受けるものは戴いて受けたい。

それを受けて立派な成績を擧げるやうに

したい。

立派な材料を貰はなくとも立派な作品は作れる、作品の巧拙は我等の腕にあると思ふ。

美味しいお饅頭も胃患者に與へれば病

出さねばならぬ事にもなりますから一寸困りますが。然し抽象的には申し上げる事も出来るでせう。今日は私も勞れましたから、此の次ぎお越しの時の話題とすることに致しませう」

と御約束して下すつたのだつた。

かくて私は大きな期待を胸に抱きながら、そして今日と云ふ日が、實に思ひがけない、私の一生を此日から變化させるのではないかと云ふ豫感に、こゝろの晴れやかさを覺えながら師の家を辭去したのである。(つゞく)

鈴木金平畫

勢が昂進して仕事が出来なくなる、健康者が食へば益々元氣が出て仕事の能率を増進する。畢竟結果の良否は我等の健康の良否に在るのである

何事も凡て(因)の發動があり、之に縁が反應して結(果)が現はれる、先きの場合の饅頭は(因)であり食ふ人は(縁)である。

水は蛇に飲まれて毒となり、牛に飲まれて乳となる、水は(因)で、蛇は(縁)であり、牛も(縁)である。

我等は時に意外なる境遇・地位・待遇・

職務・災難・金錢・物品・衣服・飲食・住居或は面倒な問題を與へられることがある。我等は如何なる態度で是等のものを受くべきであらう乎。

我等の崇拜せる釋迦は、基督は、孔子は東西の英雄は、果して如何なる態度で夫等のものを受けたであらう乎。

頂く心持！此の心持を以て受けたに違ひなからうと思ふ。願くば我等をして最も善き(縁)たらしめよ、如何なる(因)を受けても最も立派に(果)を結ばしめよ。

また諸佛の中には、彌陀如來の光明 最も勝れたり (同四三)
 凡て佛の功德を論ずるに、乃ち能持、所持の義あり。謂はく、壽命を以て即ち能持とし、餘の諸の功德を皆な所持とす。一切の萬徳は皆な悉く壽命に持せらるるが故なり。何となれば、若し壽命なくんば、相好、光明、說法、利生及び諸の莊嚴一切の功德何によりてか任せん。之に據りて之を觀るに、獨り唯だ壽命無量の一願、自餘の諸願を擁持す。大悲の善巧、また此の願に顯はるるなり (同四四)

抑も彌陀如來の壽命無量の願を發し給ひしは、己が身を愛惜して長壽の果報を求め給ふにあらず。ただ是れ濟度衆生の爲にして亦た衆生をして欣求の心を發さしめんが爲なり。一切の衆生皆壽命の長遠を願ふが故なり。阿彌陀を願じて無量壽と云ふ、良に所以あり諸佛の功德ただ壽命を以て第一の功德となす (同四五)

光明と云ふ事の中にも無邊光とか智慧光とか云ふやうに、理智的なものもありますが、それらは畢竟は讃めたゝへる對象となり易いもので、こちらとしては勢ひ感情が勝つて來るのは當然です。

然るに「命」と云ふことになりましたと、最も實質的なもので「一切の衆生皆な壽命の長遠を願ふ」と云はれた通り「命あつての物種」であり「死んでも命があるやうに」と願はないものはないのですから、願ひの感情の中に意志が

強く働いて來ます。即ち情意が併行して居ります。其上、通常では得られない「命」が得られるのは彌陀の無量壽の中に融合し統一するからであると云ふ。判らないながらも一つの信仰的な理智が働いて來ますから、此の簡單な「南無阿彌陀佛」と云ふ言葉の中には、人間の理智と情意が平均に働く譯で、至極健全な信仰を養ふことが出来る理由でもあります。

だから私は宗教の中では佛教が一番正しく、佛教の中では日本佛教が一番實質的であり、日本佛教の中では日本淨土教が一番純粹なものだと信じて居ます。

然し其處まで來るには私としては随分悩みましたものです。それは今でも問題になつて居る謂ゆる「指方立相」の問題だつたのです。

即ち「果して阿彌陀佛は存在するか」と云ふ事と、「西方淨土は何處にあるか」と云ふ事でした。

之が解決しない限り念佛する氣持には何うしてもなれませんでした。

たゞ理論やお話でなく、事實に實證しなければ信する氣にどうしてもなれなかつたのです。

「實證を得なければ」

編輯後記

△佐藤春夫先生が本誌のために
創刊以來一方ならぬ御助力をな
さつて下さつたことは讀者もよく

御存知のことと思ひますが、本誌
には特に先生が力を入れて下さ
つて、編輯のプランをも提出して
下さいました。同人一同非常に感
激し 先生の御示教下さつた計畫

を出来るだけ實現するべく努力
いたしました。日時その他の關
係でそれを充分に果し得なかつた
點は佐藤春夫先生及び讀者におび
しておきます。

△然し佐藤先生御教示の編輯プ
ランは確かに本誌一段の飛躍のた
めに絶大な力であつて本誌にも
その一端を覗ふことが出来、號を
追つて益々躍進を續けること疑

ひなしです。

△本誌にはまた現文壇の大家、

「出家とその弟子」で誰れでも
御存知の倉田百三先生の御執筆を
患はしました。先生の深い信仰の
把握はこの一文の中に充分に覗
はれる、近來出色の信仰隨筆であ
ります。

△窪川旭丈師の講話は大鳥徹
水師のあとを受けて、讀者に生き
た信仰を語るでありませう。

△今月のこども欄は佐藤春夫先
生の宗教的な童話、この文壇の巨
匠が信仰的熱情から描き出した
物語には同人等も強く胸をうた
れました。「ガンバリカンチヤン」
は都合により一回休みました。

△來月から「讀者の聲」をのせ
たいと思ひますから、批評、希
望、讀後感などとしく御下
さい。

浄土 七月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和十二年六月三十日印刷納本
昭和十二年七月一日發行

(定價金十錢)

編輯兼 眞野 正順

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ三
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園四丁目四番
振替東京八二一八七番

「浄土」購讀規定

一部 定價 金十錢

(送料一錢)

一ヶ年 金一圓

(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法
然上人續仰會の會費です
入會申込みと同時に一圓
御納めになれば、「浄土」及
び月刊新聞「法然續仰」が
一ヶ年間購讀できます。
その他種々な特典が得ら
れます。

佐藤 春夫著 小松放菴挿畫・裝訂

法然上人
別傳 掬水譚

特製ノート型
十二ポ総振假名
豪華・絢麗版

文豪佐藤先生の流麗圓滑の文と畫壇の雄小杉畫伯の枯淡風雅
な挿繪になる昭和の生きた法然上人傳!

定價 送料共 四圓二十二錢

△著者署名の特典

特に記念のため、法然上人續仰會へ直接注文に限り
著者署名す

之ぞ斷然優秀の

消炎鎮痛貼布藥

- 一、皮膚に貼つたまゝ入浴差支へなし
- 一、貼り換へず共一晝夜藥効を持續す
- 一、綺麗故不快の貼りアトを残さず
- 一、藥臭もなく悪性のかぶれも起さず
- 一、何れへ貼つても柔軟伸縮自由自在
- 一、ロートエキスを含み最新の威力



佳人の膏藥

ママプラスター

愛讀者御優待

御住所氏名明記の上大木合名會社宛御
申込下されば本誌讀者に限り見本贈呈

適應症

神經痛 肩の凝
リウマチスの痛む所
運動に因る筋肉並關節痛
勞働に因る筋肉並關節痛
打撲 捻挫 胸痛
手足首背腰の痛む所
乳腺炎 齒痛 靴擦
病氣腫物 蚊傷



大木五藏圓本舖

大木合名會社

東京市神田區鍛冶町三番
電話代田表壹壹〇五番

各藥店にあり

二十錢
十錢
五錢
一圓

新刊

中里介山著

法然上人傳

三六版二五〇頁
九ボバラルビ付
美麗クロース装
定價 六十四錢
送料共

法然上人を知ること、これは日本人として最大の常識である！

著者の言葉から

法然上人傳の權威は何んと云つても「勅修御傳」である。「勅修御傳」即ち「法然上人行狀繪圖」は伏見天皇、後伏見天皇、御二條天皇の三帝が法然の遺徳を深く敬信なされてゐたが、その時分は異教の手あひが争ひ起つて妄りに法然の傳記を作るに至つたので、正統の深くこれを憂ひ、天子にも御心を惱ませられた結果、後伏見上皇の勅により叡山功德院の舜昌法師が近代杜撰の著作を捨て、信用すべき實録をとつて收め、(中略)十四年を経てこの行を了へたものである。(中略)それ等を要譯してこの雅文の典籍を比較的安易に讀ましむることは現代人に對する一つの親切であると信じて、敢てこれを爲して本書を作つた僭越の罪を許されたい。

古文豪の通俗化！

發賣所

法然上人鑽仰會

芝區芝公園十五號地
振替東京八二一八七

◇ 社友の隣 所行發 ◇

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十一年六月廿日印刷納本 昭和十一年七月一日發行

淨

土

第二卷 第七號

定 三十錢 (送料一錢)